

奥州安達原

竹田和泉
近松半二
作者 北窓後一

○第壹

竹本三郎兵衛

時ハ康平五つの年後朱雀院の朝ニ當つて東夷猥ニ逆威を震ヒ王命ニ
背キ奉るといへ共源氏の武功ニ切靡け再び治る時津風八幡太郎義家
公武威磨立つる鎌倉は所暫く銳氣を養ひる頃ハ如月半の空都々勅使
下向有けれバ早門出の日も近付き取傳へたる梓弓箭叫びの音勢子の
聲さも嚴重ニ見へよける宮居間近く飯屋を構へ八幡太郎義家朝臣執
權鎌倉の權頭景成瓜割四郎糺異儀を守つて扣ゆれば上座ニ勅使大
江大將維時冠の紐の長き日も早西山ニかたむきぬ維時義家ニ打向ひ
此度某罷下る勅使の趣餘の議ニあらず中宮は産の祈此度の大赦ニ

付き奥州の流人桂の中納言則國召しかへすべしとの勅詔、奥州の源氏
 の任國義家宜しく沙汰すべしとの事也と述らるゝ、義家ハッ領掌有中
 納言則國との聊の科よつて、父頼義が任國の砌、奥州松が浦へ流され
 今の存命、此度赦免の下し書義家計ひ奉らんと、勅答有ればコレ義家流人
 の事は下狀を以て事の足、邊は是々直上洛、十握の劔も今もい
 て行衛まれず、かほどの大事を餘所まき優々と在國し、鹿狩山狩も日
 を送るゝ君への不忠、但し所存有つての事かど、何がな横は蟹公家の爪
 を隠せし奸佞邪智、維時の仰共覺へず、雲上より月花の詠、武士の狩
 漁の軍のかけ引き、軍慮忘れぬ武士共が、未熟の手ずさみは意入て祝
 着と、一句の答は返答も何がなどへらず口、いか様音は聞へし、貞任宗任、
 鬼神をも欺く曲者敵は取てゝこの者、随分と稽古えて、敵の首より
 こつちの首の用心が肝要ならんと權威をかさゝ嘲弄す、こらへ兼て權

頭憚かみはりもなく進出すすみいで勅使ちうしと散ちひ差扣さしかへ罷有まかりあれり餘り數あまは一言いひこと先年栗坂くりざかの
其一戰せん小勢せうを以て大敵だいてきの逆徒ぎやくとの張本ちやうほん頼時よりときを討取うたる其日の軍勝いくさかつは乗
つて追打おひうちせざる軍いくさの法か彼六路かのりくたうの誠まことは存知ぞんち有てのは批判ひはんかや返答へんたう
承うけらんと話つめかくれり瓜割うりわり四郎しやう權頭ごんのかみ高官かうかんは對たいして不禮ふれいの過言くわごん扣ひかへ
召めされど維時これは諂へつちふ奸曲かんきよく義家よしかそれと左右さいうを制せいし維時これとき公こうの批判ひはんも武
勇ゆうを勵げすは計はからひ武ぶの憤いきどほりは其身そのみを忘わする景成かげなりが過言くわごん何條けんりよ賢慮けんりよもかけ
らるべきと事ことを治おさむる明智めいちの詞ことばかゝる所へ小林こばやしの鄉民さうみん共とも折おりは籠こめたる鶴つる
十番とつがひは前せんは差置さしおき中ちかにも庄官しやうくわんとおぼしき男おとこ伎屋きや間ま近ちかく頭かしらを下さげ此こ鶴つる
日毎ひごとは小林こばやしの宮居みやゐ近ちかかりは故ゆゑ所の者もの退ひいひへ共少ともしも恐れおそれず飼鳥かひどり
と存ぞんずれ共下かの勝手かつては悪いわる大鳥おほどり夫故むゝ村中むらぢうが寄合よりあひつ付け相談さうだんの上殿のうだま様
へは獻上けんじやう宜よろしくお上かみのお取次とりつぎ頼上よりるといひ捨すては前せんを立歸たちかへる義家よしか甚はなはは
悦喜えつき有あり誠まことは鶴つるの仙家せんけの靈鳥れいてう我先祖せんぞ六孫王そんわう東夷とうい征伐せいはつの其折そのおりから此所このところ

よて雌雄の鶴を得給ひ、源氏の武威千歳の後迄、暉くべき印也と此小林
 の岡に放し、所を直ぐは鶴が岡と名付け給ふ、時といひ所と云い旁めで
 度き家の吉瑞六孫王の古例に任せ、八幡太郎義家は放つと金の札を
 付け此所に放し置き、八幡宮の神鳥と普く天下に觸流し、神慮を仰奉ら
 んと恵も深き御上意に皆くあつとかんじ入る、景成遙の梢を見渡し
 心得ず、歸鴈行を乱る時、伏兵有との兵書の禁曲者ごさんなれと、立
 ち上れば大將よくも咎し、權頭鎌倉の留主を預る汝、其心がけを見
 よふ爲の我計ひ、伏勢あらすと扇をひらき、招かせ給へば茂方顯れ出
 る、此度の供は勇士のめんく、皆坂東の譽の弓取秩父十郎伴
 の助兼、縣の次郎、其外譜代恩願の武士早立と白幡は摩隨ふ源氏の威
 勢、朽せぬ資金の鶴が岡都をさしてぞ、空行の、何事も、春に吉田の神社、百
 さいづりの宮雀八百や万の鳥の音も、賑ふ神の誓かや、参り下向も多き

中人目も夫れと襦うちかけの九條の里の戀絹こひぎぬ迎むか廓くわくも名有る全盛せんせいの松の位の太
夫職しよく二世と兼たる戀中こひなかの生駒なまこま之助も添そひたやと歩あゆみを運はこぶぞ殊勝しゆしやう也禿かぶらうの
市彌いちや不審ふしん顔がはす太夫さんへけふの生駒なまこま之助様も逢あひも行ゆくとふえやんして、
來て見たりや吉田で有つた、コこ狐きつねがつまみせんかといへばよつと打うち
笑わらひ、久さいえう便たよりも遠とほざかり案あんじもあらたな神の利生りしやう、大さうな願ぐわん参り
近いと思へど餘程よはばの道定てそなたもえんどかうといふ向むかふ先拂はらひ、
遠目もそれと追さつ太夫お市彌いちや、そなたが常住じやうぢやう拜いたがる生いた雛様ひなさま、傍そばで
無禮ふれいと花のかけ、舍人どなりがきえらす車くるまの、當今とうぎんの弟君おん環たまきの宮みや、まだ振袖ふりそで
の苔つぐみから役目やくめも重おもき匣くしげの内侍ないし、附つきゝ賑にぎはふ花の本争もとあらそふ女中おんなちゆうの袖袂そでたもとは機嫌きげん、
斜さめならざりし、馬場ばば先の方かたも歩あゆみ來る若侍わかしらひ、武將八幡太郎義家の近習きんじゆし志
賀崎生駒がさきなまこま之助英夫のすけはるよさと見る方遙はるかも飛去とびさり頭かしらを下くだげ、忍しのびの行幸みゆきといふ
ながら、太切たいせつ成る君の物詣ものもいで主人義家某よしゐそれがしも付つけ、餘所よそながら車くるまの

供と、言上すれば、匣の内侍、ま、道ハ天下の武將と呼るゝ程有つて、道を守
 る義家の心遣ひ、宮様も嘸戯感、殊更長閑、春の氣色ハ氣慰のけふの
 お供、物堅き直方殿是非供と有つたれど、ふやらこふやら所のお
 留主を、いかもく、太切成るゝ所とす、四角四面な直方殿ハ遊興の
 供、花も紅葉もくすぼりかへる、何がな宮様のお慰をと見やる木
 影、驚の首、覗て見たり引つこんだり招くおばなの鼻の先、冷汗かく共
 えらざる女中、匣のそれと見て取つて、供の者共、宮様も異ない機
 嫌、今暫くお隙がいろ、お迎ハ入相の花ちる比、早ふくは雑式仕丁、殘ら
 ず打連れ立歸る、生駒の此場をくろめんど、眞顔ハ成つて、女中様は
 らふじませ、所方ハ珍らしい、遊君とやす者、はらうじた事とざりま
 すまいといふ、内侍が何遊君とや、江口の君のうかれめと古今集で
 見たれ共、直きと見るハ今が始め、早ふは生駒之助、えてやつたりと

一人笑、彼太夫めが揚屋入りの道中を、今爰へ取寄てお目の正月させません、それくそこへ、もふ爰へと胸仕形を戀絹が、かい取小づま八文字、よるべ定めぬ流の身もすいた、男の有バこそすかいでは是が勤まろか、くくだ斗りと生駒が傍寄らんとするを目と仕形寄るなとえらせど、えんき、けふお前と連れ立て、此吉田で呑明かすとさつきよからと、膝も取付きあまへ泣、こたへ兼たる辛抱袋、破かふれど、生駒がやくたい、二人がそぶりを女中達、生駒殿あの傾城、そなたの相方とやらいふ物かど、いゝれて恟り心付、扱めつそふあ仰物堅き八幡が家來廊遊びの夢、よも存せぬ、そんなら今の、客を捕まへて此様にするが傾城の仕打、そこで客めがたわぬゝ成つて可愛色を引寄て、此様よて抱しむれバ、志賀さん、らつちもない事隙入すと、さぞござんせど手を取れバ、いゝどふでもそなたの馴染やと、手め上られて生駒之助、近付きでもな

いくせゝいろいろの事ぬかす故、あなた方への云譯なし、お前がわし
 ると又取付き、兩手をぎつと引きまゐて、かふした所が廊の口舌先づあ
 ら方、こんな物ど、口から出次第云次第取付き引付く向ふ、歩來る瓜
 割四郎朱鞘の大小いかつげゝ、それと見るより強腹ながら、生駒殿、主
 人義家太切成る急用有り、早ふの聲ゝ恟々飛退て、急用とい覺束
 あし、貴殿様子を聞ずやど、立寄る生駒を突飛し、太切なる役目を受け、夫
 ゝ何ぞや女を捕へ見苦しき振舞、何かの用も我等のえらぬ、早おいき
 やれとねめ廻す、戀絹生駒の目を見合せ、道理は詮方投首し、心残して立
 歸る、續て立つ戀絹を、四郎が留て、主、われ、首だけ惚てゐる
 四郎、ふつて、解り付け、生駒ゝばつかまきつい乗りやう、胴欲ぢやど
 よ、爰な命取めとえがみ付、ふり放して逃げ行をどつこいならぬと又
 取付く、これやし、どうぞ歸なして拜ます、ヤ、拜むの、こつちからど

詮方せんかたなんぎの最中さいちゆうへ、鳥とりをさいた見みさいいなさい鳥とりさいた見みさいいな。何なにも得えとらず、餌えさ差さ竿さん物見ものみだかい女中達おやぢうちやうだちとく宮みやのお慰なぐさ四郎しやうらとやら其鳥指とりさし爰こゝへよびや、四郎しやうらくゝよハア、鳥差とりさしお召めしじやうせおれど云間いよまをはづして戀絹こゝろぬいが逃にげ行跡ゆくあとよなむ三寶さんぼう大事だいじの鳥とりを飛としてのけた鳥差とりさしめ覺おぼておれどつぶやき跡あとを慕したひ行、鳥差とりさしの立寄たちより餌竿えさんをおろしえやよ構かま一つひよ鳥とりひゑるの山の二つ梟ふくろう二子の山やまよ、三つ木兎みづみ都鳥みやとどりそこよ、かしこと立たちまふ、ふりよて匣くしげの袖そでへ投げなめを、ひらくゝひらの檜木ひのきの枝えだとそらさぬ風情ふうせい多取とり上げて匣くしげの内侍ないしいふかしき賤しやうの振舞ふるまひ、は前せんよ叶かひぬあつちへやとやど、み投捨なげすれバ女中達おやぢうちやうだち下くだゝの身分みぶんで内侍ないし様さまを付けつけみとい、大それた慮外りよぐわい者もの早立はやたちて行ゆけくど、せり立たてられてもびく共どもせず、下くだゝで有あふが、何なにで有あふが、戀こゝろ又上下じやうちやうげの隔へだていなし、但ただし又鳥差とりさしが上うつかたゝ惚ほる事こといならぬといふお觸ふでも有あつたか、何なにでも思おもひ込こんだ此男このおとこ返事きか聞きねバ

いつかなくど人目遠慮もあらくれ男、レ狼籍者誰ぞ参れど呼どおり
 めふ人もなく隔る女中をはり退ふち退け傍若無人の狼籍、内侍の宮
 様かい、敷く、のふ、こいやと局達神前さして遊行を、同、女め一擲
 と、大手をひろげ逸散、跡を慕ふて追つて行、内侍の宮をいざおひてつ
 まづき轉び出給ふ、跡からいつさんかけくる鳥差内侍様、まんまど首尾
 よふ参りました様子、今のみの通り早ふ、とせき立れば、レ内侍の宮を
 伴ひて、何いふ隙も嵐、連何國共なく落て行、かくといえぬ女中達お
 ろく、目よて走り出、コリヤ鳥差、宮様どちへ連れいたとすがり付を踏
 飛し、ア宮が見へねば身がえらふか、そこ退通せ、イヤそなたが連いた宮
 様をこつちへ戻えや、イヤえらぬ、イヤそなたがど争ふ半條杖直方は、歸館遅
 しどかけ来る松かけ、様子を斯どかけ寄て鳥差が左の脇つぽ、丁ど入た
 る霞の當身、コレ宮様のいづくもおひする、レ内殿の内侍、問もいら立

こなたもうろく、あの鳥差が狼藉故、宮様伴ひ匣様のあの道へといふ
間もわくせくかけ行女中、扱こそ曲者はかして聞んど又一當、むつくと
起る間稻妻の懷劔喉、つぎ立たりなむ三寶詮議の種、へッ、えなしたりと
氣の夕陽車輪の如くかけ廻り、さも有れいかよと死骸の懷中、手を差入
れて引き出す一通、さつと披て讀下し、何と環の宮を盗出し給へるべし
と、匣の内侍へ頼の狀、何者共名を記さぬ、朝庭ははびこる佞人、大江の
維時、なんどがえいざか、何よもせよ、逆臣は出しぬかれしか、口惜や去
ながら、是こそ詮議の手がしり、究竟一通懷、えつかと納る忠臣の、心
の闇の道筋をいつさん、こそ、歸りけれ、西洞院左女牛の殿造、八幡太郎
義家朝臣、再鎮守府將軍、よは拜任の悦び迎、在京の大小名思ひく、の
は獻上、銚口上使者袴、奏者の女中が受答花をちらして持運、ふ開い中ち
らほらと一つこかげゝ寄つとひ葉櫻、様何とは家中も多いい中、よい男と

いふに生駒之助様、かゝいらしい殿は、玄やないかと、いへんみはしが、
 まゑに顔は似合ぬ物堅さ、其顔は似合ぬで思ひ出した茶の間の楓か
 あの顔で、生駒様を付つ廻しつ、何と身の程を知らずじやないか、いのと、議
 後へよよつと出た頼のすもゝの花楓、櫛笥鏡臺携て、皆様聞ておくれ、
 わしが此様と思ふのよ、生駒様の聞入れのないいどふした事と思たり
 や、あのお方の傾城すきでこちらが様な大むくの嫌ひ、夫れでわしも今
 からはでいゝ身を持つて、生駒様と思われうと、いおぐし上げの磯野を
 頼結て貰ふた此釣舟、似合たか見ておくれと云目付のえたりるさ、こら
 へ兼て吹出す口の間々、は家人爪割四郎、紅袴の角菱いかなだ頼付、何
 ざんくともめらう共、うぬの楓め、悪くさいやつこりや、お玄關近く、女
 の手道具見苦しいばかり者めと、蹴飛ばされてさんらんこはい、皆々次へ
 送げて入る、面倒な此手道具、持てうせぬか、誰取て捨よと呼りりく

奥へ入、門の方さゝがしく出あらふくと下部が聲、様子に何か白洲
先かいどり小づま八文字、女め待て、家中に見馴ぬ風俗胡乱やつ、サ
名をぬかせ聞ねはいつか、合點が行ぬの聞ねならぬのと、無理
な客様の色事をせかんす様、扱の儕はいたよあ、爰をどこだと思ふ、
忝くも八幡様の屋敷、出あらふと引立る、ふすい、人の心もえらす
ふ、其様、呵らんす物、えやあい、其八幡様の家來、生駒之助様、逢ね
ならぬ譯有て、コレよいお人、えや、誰やらおもてへ逢、來てゐると、ちよつ
とあの様を爰へ呼出して下さんせ、又此生駒様も、何して居さんす事
ぞやしら早ふ逢たい、出て下んせぬ事かいの、エ、えんきやど式臺、身
投げ嶋田、すいせんの流れはで、顯れり、えやうのこい下主女、
ちばらに卷ぎつ上とひしめく聲、何事やらんと立出る志賀崎生駒之助、
一間をすつと顔見て、恠り、やゝ庭へ飛石の、堅い顔付き氣色をかへ

下郎共は座の間近く尾籠の高聲、此女め、胡乱者故引捕へて、生ぬ
るい、わいらで行ぬ身が詮議する、早く下れ何馬鹿やつと、呵ちらして退
立やり、邊を見廻しつと寄る、戀絹嗜め、何事、物堅きお館の格知
て居ながら、はでな姿で晝日中、お上へ聞へたら生駒之助の痛い腹、人
の見ぬ内、早く、といふ間も若やと胸どき、せく男よりせき入
る戀絹、生駒様、ひよんな事が出来てきて、夫でお前も逢たさ、早くお
ん玄や、ひよんな事どの氣が、り、其譯を、早く、サア、其譯といふ、客の
誰かえらね共、わしは合點もさせず身請の相談、親方がいよ手附迄受取
つた、と聞とはつたり、此つかへどふかこうかと案、ざる折から、欠落、ま
て、こいとお前のえらせ、そりや誰が、四郎様が、何あの瓜割、四郎が
そふいふたを、誠と思ふて、スリヤそちの廓を、欠落、まてきたいな、はい、はつ
と斗ふ生駒が、當惑、合點の行ぬといふてゐる間も、そなたの此形、人が

知ての一大事とふぞ隠して置く所を、とどふせうぞこふ障子明ける物
音出る櫺見付けられじと戀絹を、こかげへ押しやりそらさぬ顔櫺に其
儘すがり付き、氣の悪い生駒さん、今のまだらんどふぞいな、あの子斗
が眞實で、惚ぬいてゐる此わし、うそよいとしと思ふかど見捨られた
もあの子故、傾城と譯有る事今の様子も書き置きえて、わしやいつそ
死覺悟と、用意の剃刀生駒に驚き待つた死るとい短氣千万、そして、傾
城と身共が譯を書き置きえてよい物かど、留める兩手をじつとまめ、
そふいわんす、叶へて給へる心かへ、夫れい、そんなら死るゝ放した
とこの高、こまつて詮方なんぎの手詰、そんなら應じや、嬉しやど抱
付かれ、顔を背ける生駒が思ひ生々坊主が精進の馳走、禮いふ心地
なり、折もこそ有れお客のお入どのしめく聲、何が幸ひ、くお客のお
出と引つぱづして逃げ行生駒、志賀さん、夫婦のかためいわしが部屋

必待て居るぞへど、尻ふりちらして、走り行程もなくのつさく入来る
 權威の鼻、大江、大將維時打紐えたる白木の箱、雜掌笠原軍記も持せ傍見
 廻し聲をひそめ、汝も兼て知る如く年來の我、大望、青公、家原の大半、味方
 もなすといへ共、只手ごねき、八幡太郎義家平の餘杖、直方きやつら兩
 人禁庭はへちまへバ、何かと手延無念至極、何卒罪も落さんと肺肝を廻
 らしなんなく、直方の術の網も打込、けふ中も仕廻ふ合點、此上の義家一
 人、彼が家來瓜割四郎我、味方も付けたれば、十が九つ大望成就、只儘あら
 ぬの戀と云曲者、義家が女房敷妙、いろくど心を盡せど、今も色よき返
 事もせぬ、何でもけふの此艷書を合點かと、渡せば取て懷中し、今日中も
 御手も入ん、必ぬかるな合點と欲と色との間の襖、出向ふ瓜割四郎維時
 が傍近く、お頼の通り生駒之助、えくじらす術上首尾、きやつがなじみの
 傾城を此館へ引入、夫れを越度も打殺せば、風の神で戀の敵、戀絹を我女

房はうもといふもぞくくでかした、くさい先せんよし、艶書えんしよの事を軍記ぐんき合點がてんか、瓜割うりわり必仕損しそんすなど、二人ふたりを立たする間あいだもなく、さど打かほる、絹かの香か、義家の奥方おくがた敷妙しきたへは前せん襦うら姿かけすがたもまどやか、維時いとき公こうは苦勞くろうのは出で夫義家そぎ早速さつそくお目めよかゝる筈はずなれ共、今日けふの非常ひじょうの大赦たいしや何かと取込とりこみ罷有まかりる、無禮れいの段だんの眞平まっぴらお赦ゆるしは用の品しなも在あらば私わたくしもと、聞きて維時いとき異儀ぎぎ繕つくろひ、義家の内證ないしやう此比このころに打たへやた、其元もとの親父おや直方ちかたは預よりの環たまきの宮行方みやぎがたなく、老人らうじんの心づかひ、そこよも親の事なれば、嘸案さそじ召めされう、夫れその格かく別某べつそれがしけふ罷越まかりこす事別義べつぎならず、義家ぎけは近々しんぢやう東國とうこくへ進發しんぱつ、門出かどでを祝いははん爲維時これときが寸志しんしの音物いんぶつ、改めて受納じゆきふ有と件くだんの、太刀箱たちばさし置おけ、是こゝは、何なんから何迄なんぢは深切しんせつのは詞殊ことば、夫そが門出かどでを御祝ごしゆひと、義家ぎけも嘸悦さよろこびど、蓋押ふたおし明あくれれば、こゝいかゝ切柄きりがしたる荒身あらみの刀や、愉びつりさすがに武將ぶしやうの妻つま、さあられ体ていも取上げて、武士ぶしの門出かどでは打物うちものと、御心ごしんの付つきしは音

物去ながら、是に正しく科人をためす不祥の刀ど、いふをおさへてコレハ敷
 妙、心を籠し我音物婦人が聞て何を判談、義家も見すれば胸も覺への有
 る事さ、どつくりと思案をえて、其刀の返答を相待つと、某がやすとい
 れ、奥方ど、割て云ざる切柄、いか様子細新身の刀、鞘よしつくり納て
 も、心のどきつき納らぬ、氣を取り直し、姫とせのちゑも及ぬ事、義家も右
 の品、お出の様子もす聞ん、役目濟迄暫しの内、其刀の返答聞切る
 迄に歸らぬ維時、案内召されど權柄、押柄敷妙も打つれ、一間へ入るける、
 口の間々奏者の女中生駒様、くと呼つ々聲、生駒之助是も有り何用成
 るぞと立出れば、すしあなたもお目まかしくらふと、九條の里のくつわと
 やらいふ者が、キくつわが來たか、たまらぬ、我等が逢て、事六つかし
 こなた衆頼む、コレかうくと、耳も口、こかげも有あふくし、鏡臺抱て奥
 へいづし行、程なく白洲へ小腰をかいめ、私に九條のけいせい屋文字

屋の友三、是なり請人の惣助でござります、私拘の奉公人戀絹とやす女、
去る方へ身請極る手附迄請取ました所、夜前廊を欠落何が方々と尋
ますれ共、どのと行衛が知れませぬ、さつする所戀絹がふかまといふの
是の、家中生駒之助様、身請を嫌ふて廊を出たから、外へ参らぬ此
お屋敷、爰に殿様のお白洲先、鹿相な事など、上けたら、ア、アおつ
ゑやるな、お前方の素人、慮外ながら文字の友三といふて、すんど黒い男
、此惣助も身晴、何ぞや有ふと生駒様は逢ての、おりのり、又逢えやれ
ぬがさいご、奥へ踏込直とみど、口を揃へるくつわがゆすり、一間の内、
大音上、く八幡太郎、是は有り、己等下、の分として上を恐れぬ推参
者、引つくつて、牢へ打込覺悟えおれど、かさ高は襖ぐつたり立ゑば
し、大紋くつと目の中の、さよろ／＼するも思ひあし威は恐れてどん
ぽう返り、お赦しは免と跡えさり、よい所へ付け込んで一寸も動さ

おるまい、返答が悪いと道が飛ぶもえれぬぞ、思へば、又つくいやつ、
 傾城も同じ女、かいいそふいやな男、身請とい己等が身がつ手、すい
 た男、添してやるか、ハ、ア、そんなら赦してこます、あのくどくどめがど
 強ふ見せたる足拍子はづみ、すつぽり立るぼし、結びめ解て、櫛拂の頬
 髭落れ、傍邊、ハ、生駒が取のぼす顔のゑの、くも汗たら、所班の八幡
 大名、俄、え、え、よげる顔を見て、ア、こなたい、生駒之助とい、れてなむ三
 く、玄つたど、天窓拘て、逃入れ、ア、大街の生駒之助金の代、連て、いで
 廓の法の桶伏と、かけ入んとする、一閃、兩人扣へ、先づ待てど、立出給
 ふ、義家の妹君名も、八重幡の九重、花も、おさる、品形、そこなくつ
 わとやら、其様、又、詞をあらし、若も、此事、兄義家様のお聞、立、そち達、が
 身の上、生駒之助、迎も、同じ事、そこを思ふて、留、又、出た、自が情、なんと其
 懸絹とやら、が身、の代、を辨へな、そち達、云分、有、まい、が、何、が、扱、お

金さへ受取ますれば、そんならば其傾城自が身受けえた、夫持て早歸れ
ど寝耳へ水の山吹より花も實も有る取捌さば忝かたじけなし有がたしと戴いたいさ
みくつわやの九條をさして立歸る、生駒のめんぼく中敷居出るも出ら
れぬ此場の品戀絹の一間々姫の情の有がたさ出るもおもて、伏沈ふしむ、八
重帷ふたのえとやかゝ、姫をせの相身互、何の禮も及ぶ事、かふして世話をす
る身も心も任せぬ憂思うれひ、物馴しそもじを便力たよりも成てと斗りよて、思
ひ入たるは風情ふせ、お姫様の改つた、大恩受た此身の上、お心も叶かぬ事
あらば何なりと、おつえやれどふぞいなと、いねれていと耻はづしさ思
ひ初たる戀人よ千束の數の重なれど、おつえやるなよめました戀の
手管の勤の道私がかうやからいお心づよう思召おもしめ、其惚ほてござんす殿
はといふい、お公家様かお大名か、い、大名でなし公家でなし、そもじの
馴染の生駒之助と、聞て胸むねり差わたる恩と、情なさけもからめられ今更何と思

案さへ、壁に生駒が聞ぞ共思ひ、極て傍に寄、二人が譯を存の上私へのお頼み、よく／＼せつないあなたの戀路、切に切れぬ中あれど、いつそとんと思ひ切て、私がお世話致しませうといふをこちらに立聞ておれを思ひ切たといふ、うそか誠かどやかくと氣にもめくさの袴は汗、姫はいそいそ嬉顔わりあい無心此上、只よい様と袖口は紅葉かざして入給ふ、かげ見るや見すつか／＼、胸ぐら取て、戀絹、儼いな、見さげ果た根性、そふいふ心といふ、えらすつもられたが残念など引つ廻しつ打たく手は取付て、よういふて下にした、女房宏やと思ひ、えやんすりやこそ、打もさえやんす擲もさんす、お前の様な眞實な殿が又と世界にあらうかいな、身請えて貰た義理よせまり今の様は姫君様よいふたれど、お顔を見たれば退きでもないやつぱり元の女夫宏やと男の膝すがり泣わりあき、有様立聞八重幡、格氣の中にも二人が心、思ひやる方あら

氣の生駒、いやらしい退いてくれ、心底のくさつた女顔を見るもけが
らはしい、大方おれがやつた誓紙も身仕廻部屋のすき紙、油くさい狐わ
なよい加減又つまんで貰をと、ついと立つを待てやんせ又かんえやく
の悪さうか、そも突出しの其日よいひかひした互の誓紙、肌身離さず此
守より見さんせと取出せ、ハヤまだ其守の中は何やら有、エ疑の深い
お方はいわしがとく様の筐、大事よかけねばならぬ物、其大事がるが
合點が行ぬと引たくつて、隠し男様のせいしの文言、拜まふか、何じや、
奥州六郡の主安部太夫頼時、法名大了院、殿喜山大居士と讀もあいらず
戀絹、スリヤ此頼時といふ、アイわたしがとく様でござんすと、聞て忸り
一間、立聞義家公猶も窺ひあひします、生駒之助つくと立ち、縁は是迄
戀絹と思ひがけなき夫の詞、縫り付くを振放し、添れぬ譯、其書た物、頼
時が娘と有、ハ朝敵貞任宗任が兄弟、えらぬ昔、ハ是非もなし、源氏も仕ふ

る生駒之助、朝敵の血筋もつながつてい主君へ不忠、武門の穢ど、いられ
ていらへも涙ぐみ、けふ迄包し我身の系圖、とく様にくり坂の合戦も流
矢よてあへなきは最期、兄様達も皆ちりく行衛定ぬうき勤不圖、馴初
し二人が中、起請誓紙を忠義もかへ、縁を切るどのお詞を、無理とい、さら
さら思ひねぞ、お前も別れてそもやそも此身の何と成ぞいな、死玄や
んしたとく様も聞へぬ兄様達も兄様達、よいかげんも朝敵もやめよえ
たがよいお前の懐な男と敵味方も成様などんな軍が有物か、私が縁の
邪魔も成る兄様達、こつちから縁切る程も、いかにんして下さんせ、ま
なあすこすどくどき歎くぞいぢらしき、始終をとつくと義家公一間を
さつと押明る音も二人の消入る雪、どけぬ此場を逃て入大將端近く出
させ給ひ、誰か有召かへせし流人共、残らず是への詞の内、ばらく
出る歸洛の流人籠を出たるいさみ足、瓜割四郎は前も向ひ常盤島はだ

か嶋竹の浦松が浦、いづれも奥州一國の流人都合廿七人相揃ひいざく
汝等謹で承へれ、此度非常の大赦行へれ國々の流人赦免有る、去るよ
つて奥州一國の流人の我君へ仰下り召し返したる儕等、有がたく存奉
り、何國へ成り共立退べしと、上意はつと流人共悦ぶ聲けうくんの
の地獄で佛又逢たるごとく拜つ轉びつ出て行跡へまほし、立出る、是
も流人とまらすのさきなりも形もまよげ鳥の、身すぼらしげみ、うづく
まる、義家遙見やり給ひ、奥州の流人則氏といは身よな、早速の入洛此
上なしと、仰ふ流人謹で親みて、則國勅勘を蒙り奉り、流人と成りし其
比に我いまだ若冠成長するも隨ひ父諸共昔をこふる憂年月、海士の苦
屋の煙と俱ふ、父の空しく相果て生たるか、いも荒磯の島守めて朽なん
身の、召し返さるゝは大君の恵偏る武將のお情と、低頭平身なしけれ
ば、何父の卿より空しく成給ひしとや、是非もあむ去りあがら、今日歸洛

の此上のりくに父則國の本官を直ぐかつら桂中納言教氏のりうじ卿いざ先づ是へ誰ぞたは
 裝束しやうぞく參らせよハツ女中が取とりとよ木綿もめんの嶋守しり引かへて冠裝束花やかかむりしやうぞくは忽たちまち
 雲の上うへ人の威ゐも備そまはつて見へ給ふ其裝束を召めさるれば貴公きこうの高官武
 官の某はやか憚有と上座じやうざは進給ふすいめもど痛入いたみるは禮義らいぎ今迄いま天下の流人るにん今
 も朝家てうの近臣きんしん百官百司ひやくしは列つらちる上うへの所存を包つむむ君への不忠ふしゆ天下の
 武將ぶしやう義家ぎけは桂中納言教氏のりうじが三ヶ條の不審有ふしん先づ第一だいいちは三種さんしゆの神器じんぎ
 の其一つひとつ十握つかのは劔けん先年ふんねんは紛失ふんじつしは行方知れさせ給たまはす禁門きんもんの外うへの
 武將の守る所あまて天照神あまてらす々傳つたはりしは寶草ほうそうを分け地ちを穿うがつてもなせ詮議せんぎ
 止めされぬ第二だいには環たまきの宮みやは行衛ゆくゑましまさず是なんどの朝廷てうていのは大
 事こと察さつする所都間みやま近ちかく叛逆はんぎやく謀叛ぼはんの族さかが所爲しわざと鏡かがみもかけて顯あらはれたりさす
 れうば奪うばはれし直方ちかたは其疑うたがひなさしもあらず直方ちかたは邊へんが舅しやうとと聞及きおよぶ
 縁えんも引れてゆるかせし指置さしおくなんと世の人口くちぐちはふさがれまじ此三つ

の返答聞まほしと有ければ、調さすが遠い文道も名を得給ひし桂中納言教氏の
卿、尤のほ不審、一々承知仕る、併し此は返答の義家存る旨有れば参内
の折を以て、いかにも然らば再會く、おさらばと見送る式臺別れの禮
義、袂も匂ふ初冠大内さして歸らるゝ、大將維時一間を立出、最前敷妙も
渡し置く刀の返答いはずと胸は覺が有ふ、舅直方が誤り一家逆用捨の
成まい、首討て渡されよ、イヤそふに罷りならぬ、環の宮を奪れしの一應の
越度計でない、大切の詮議有直方、かるゝ敷く首討て、宮の詮議は何を
以て仕らん、ちとほ鹿相も存ると、やり込られて負ぬ顔、左程拔目さき義
家が、家來の不義のなせ詮議せぬ、軍記承へると笠原が引立出る戀絹
生駒何と見られしか、主の屋敷へ傾城を引入れる放埒侍我家の事さへ
得えらぬ、邊天下の武將心元ない、是でも見事大切の詮議をするか義
家と、何が惡口嘲弄も理の當然よ、さしもの大將、拔差ならぬ此場の時

宜^ぎ二人をはつたと蹴^け落^おし給^{たま}へば、身^みの誤^{あや}り又^{また}詞^{ことば}あく、白洲^{しらす}又^{また}頭^{うづ}を埋^う居^ゐる
 敷^し妙^{きた}、最^{さい}前^{ぜん}の切^{きり}柄^{づか}の刀^や持^ち參^{さん}せよ早^{はや}く、と詞^{ことば}の下^{した}夫^{おつと}の心^{こころ}に白^{さく}韜^{たう}の此^{こゝ}
 刀^やに何^{なに}の用^{もち}、不^ふ義^ぎ者^{もの}めを成^{せい}敗^{はい}する、不^ふ便^{べん}ながら武^ぶ將^{しやう}の役^{やく}目^め、そふ
 なふての濟^{すむ}まいと、嘲^{あざわ}る軍^{ぐん}記^ぎが眞^{まこと}向^{むか}なし割^{わり}二^{ふた}つ又^{また}成^{なり}つてのたれふす、
 笠^{かさ}原^{はら}又^{また}何^ど科^か有^あて、こやつ大^{だい}不^ふ義^ぎ者^{もの}、又^{また}覽^{らん}なされ有^あふ事^{こと}か、女^に房^{ぼう}敷^し妙^{きた}又^{また}
 かやうの艶^{えん}書^{しよ}傾^{けい}城^{じやう}狂^{きやう}ひの時^{とき}の興^{きやう}、強^{かう}不^ふ義^ぎ共^{とも}すされず、主^{ぬし}有^あ女^に又^{また}不^ふ義^ぎ又^{また}か
 ける、畜^{ちく}生^{しやう}とすそふか、成^{せい}敗^{はい}又^{また}たが誤^{あや}りか、科^かの吟^{ぎん}味^み立^たすと、どこへど
 ばえりがかしらふやら、それ共^{とも}又^{また}不^ふ審^{しん}あらば、承^{やう}いらんと和^わらかふ、肝^{かん}
 のたばねを指^{さし}通^とされ、尤^さ、扱^さく軍^{ぐん}記^ぎめ、存^{ぞん}の外^がなる不^ふ屈^{くつ}者^{もの}、逆^{さか}礫^{だつ}又^{また}もか
 くべきやつ、手^て討^{うち}といまだは了^{りやう}簡^{けん}、兩^{りやう}人^{にん}が成^{せい}敗^{はい}ひ、傾^{けい}城^{じやう}狂^{きやう}ひの放^{はう}埒^{ちやう}者^{もの}、
 勘^{かん}當^{たう}致^ちしてあほう拂^{はら}ひ、是^{これ}も尤^さ某^{めい}も長^{ちやう}居^ゐに恐^{おそ}れ、尤^さなる趣^{おもむき}宜^{よろ}しく奏^{そう}問^{もん}
 致^ちさんと、二^{ふた}つ胴^{どう}を遁^{のが}た心^{こころ}地^ち、足^{あし}早^{はや}ふこそ歸^{かへ}りけれ、云^い譯^{わけ}涙^{なみだ}生^{なま}駒^{こま}之^の助^{すけ}刀^や逆^{さか}

手^て又^{また}取^と直^{ただ}す、犬^{イヌ}死^しせんとい^いうろたへ者^{もの}、追^お放^{はな}の身^み又^{また}いらざる武^ぶ士^し立^た、最^{さい}前^{ひだまり}一間^{いっかん}立^た聞^{きこ}けり、其^{その}女^をは貞^{さだ}任^{にん}が定^{さだ}て遠^{とほ}い國^{くに}の者^{もの}馴^なじみしこそ幸^{さい}ひ、夫^そ婦^ふと成^なて隨^{ずい}分^{ぶん}添^{そひ}とげ、彼^か本^{ほん}國^{こく}へ立^の退^{たい}かバ究^く竟^{けい}の手^てがしり、心^{こころ}得^えたるか環^{たまき}の宮^{みや}の行^ゆ衛^ゑがえれねバ、舅^{しゅう}直^ち方^{ほう}ハ大^{だい}罪^{ざい}人^{にん}時^じ宜^ぎ又^{また}因^よてハ敷^ふ妙^{めう}が縁^{えん}の切^き目^めとならふもえれぬ、添^{そひ}とげるも義^ぎ理^り、添^そいれぬも浮^う世^ぜの義^ぎ理^りと諦^{あきら}め、八^や重^へ幡^た姫^{ひめ}の事^{こと}迄^{いた}も思^{おも}ひやり戸^と又^{また}忍^{しの}ひ泣^な、縁^{えん}の切^き目^めと嫂^{あに}の情^{なさけ}の襦^う顔^{かほ}と顔^{かほ}餘^よ所^{ところ}又^{また}見^みなして入^い給^{たま}ふ、かゝる所^{ところ}へ笠^{かさ}原^{はら}が弟^{あに}同^{どう}名^な軍^{ぐん}六^{ろく}、兄^{あに}の敵^{てき}遁^{のが}さじと大^{たい}勢^{せい}引^ぐ具^ぐし退^{たい}取^とま^く、それと生^{なま}駒^こがコリヤく戀^{こひ}絹^{きぬ}、是^{こゝ}でふせげと一^{ひと}腰^{こし}を、えやんと柳^{やなぎ}の腰^{こし}車^{くるま}、石^{いし}げさ肩^{かた}げさまくり切^き、逃^{にげ}るをやらじと女^め夫^とハ白^{しら}刃^は奥^{おく}庭^{にわ}ふかく追^おて行^い、すでハ時^じ刻^{こく}も宵^{よひ}闇^{やみ}ハ外^{そと}面^もを窺^{うかが}ふ笠^{かさ}原^{はら}軍^{ぐん}六^{ろく}、生^{なま}駒^こが手^て並^{なら}ふもてあまし一^{ひと}拔^ぬけたる拔^ぬけがけハ敷^ふ妙^{めう}を奪^は取^とて我^{われ}高^{かう}名^{めい}又^{また}一^{ひと}人^{にん}笑^{わら}ふ、あ亭^{ちやう}こそと裏^{うら}門^{もん}の堀^{ほり}又^{また}身^みをよせ耳^{みみ}を寄^よ窺^{うかが}ふ内^{うち}又^{また}ハ戀^{こひ}絹^{きぬ}が多^{おほ}勢^{せい}を切^きぬ

けそこかしこ。是を足場ゝあの堀と、差たる刀拔放しつゝこひ切先軍六が、胴腹思はず芋ざしゝのた打廻る鱷武士、内ゝいそれ共白かべゝ柄の足えろ、堀の上、ひらりと飛たる折こそあれ、多勢をなぎ立、生駒之助、女房出かした維時が、家來軍六を手ゝかけしゝ、忠義の門出手始めよし。戀絹とつゝ立つ所へかけ來る瓜割大音上、扶持離れの生駒之助、色事仕か、と思ひの外手ゝほうばつたる儕が働き、家來共討てとれ、承ゐると近寄るやつぱら、から竹なしわり瓜割主從叶ゝぬ赦せと、逃失たる、返す敵も並木の馬場、さゝいへ名残と見返る生駒我も、廓をけふ限り、其うきふしもよき武士の、つゝ引上げて引ゑめて、是を直ぐゝ打立ん、其行先の不破の關清見、えら川衣が關之のぶの、關ゝ有りし身の、口舌の柵手管の關鳥の、鳴さへよくかりし、今の此身の鳥の音ゝ、國谷關を越たる例頼て目出たき世ゝあふ坂の、關所ゝをやすゝと吾妻の空へといそぎ行

○第二

琴^{きん}基^き書^{しよ}畫^{くわ}を嗜^{たし}む身共生れず、明^あ暮^{くれ}物の命を取浮世を渡る綱^{つづ}手^て繩^{じゆ}、浪^{なみ}打^{うち}際^{ぎは}ゝ
ゝざいゝと、かづきの海^あ士^まが晝^{ひる}休^{やすみ}、長^{ちやう}太^たのおかた今日^{けふ}いお代官^{だい}様^{やう}が、
此^そ外^がが濱^{はま}を通^{とほ}らえやると浦^{うら}中^{ちゆう}いもやゝ、すつきり仕^し事^{ごと}も手^てゝ付^つかぬ、
聞^ききや此中^こい長^{ちやう}太^たも潜^{かづ}ゝ出^でやるげな、女^め夫^とゑての持^かい^きかふ延^{のび}たと浦^{うら}邊^べ
の噂^{うわさ}、わの茂^も三^{さん}の内^{うち}儀^ぎの云^いる事^{こと}いひの銀^{ぎん}ゝ延^{のび}いてこちのろ性^{しやう}惡^{あく}が眞^ま
毛^けの延^{のび}るゝ困^{くる}り物^{もの}、四^し郎^{らう}のおかたの知^ちつての通^{とほ}り去^さゝ年^{とし}の月^{つき}見^みの夜^よ臘^{らつ}
納^ど臍^せ取^とりゝいた時^{とき}ゝ海^{うみ}の中^{ちゆう}でとれ合^あ初^{はつ}た女^め夫^と中^{ちゆう}、それゝ其^{その}夜^ようら
も岩^いの磧^{はつき}でこちの人^{ひと}ゝ馴^{なれ}初^{はつ}今^{いま}い子^この親^{おや}、こなたいなせゝ子^こがなゝい、子^こ
所^{ところ}かゝいの眞^{しん}實^{じつ}ゝ思^{おも}ふてゐるわしをそでゝゑくさりくさつて、又^{また}ゑても
女^めさへ見^みゝとや帆^は立^た立^た貝^{がい}、^{カンニ}うらが思^{おも}ひい鮑^{あはび}の貝^{かい}の片^{かた}思^{おも}ひゑやと思^{おも}へば、
悲^{かな}しうゐざる、こゝろやおかたのが皆^{みな}道^{みち}理^り、^{シメガ}そなた計^{はかり}ゑやないぞい

の、海商賣迎しやうばいごてどこの男も磯いそせしり、ちとらも修羅しゆらいたへぬと三人寄よれ
ば、男の噂うわさ、又男のわんざんかと、いふて海からよつこりと、上あがつ
てくる海士あまの長太ちやうたあんまりわいらが譏そと故海の中なかつでくつさめ計獵ばかりれうがき
かいでやうく、と四五はい、是でハ、鹽しほも吞のめる物ぢやないと、いへばみな
く我がおれ、男の仕事しごとは大きな物、是でハ女海士あまもはだし、いんで
取溜にりの鮑内あわびでむいたりむかしたり、皆おじやと打連つれて住家すまくへ立
歸かへる、磯邊いそべ傳つたひを、くる女房長太にようぢやうたが見付みつけて、交治かうぢの内儀ないぎどこへぢやと、
呼よかけられて立留たてどまりり、誰たれぢやと思ふたら長太ちやうた様内儀さんないぎ様は精せいが出でます
聞きて下さんせちつさが長の煩わづらひ、弱よわみの上へ大熱おほねつけふ、取分わけ様子が悪わる
い、夫それで濱手はまての醫者いしや殿へ藥を貰もらひ、此間の心づかい、わしも癩しかが發おこり
そふな、夫それのいかるこな様さんの氣もせやと、女房にようがいふを引取ひきて、内儀ないぎ
其癩しかふ、きつい妙藥めうやくが有あつて、醫者いしや殿だんは貰もらつて置おいた、待まちて居ゐやと、一走ひとはしりつ

は取て來てやろ、ヨリヤかゝ何をきよろり、今の日和ひより何時が知れぬ、そよ
そよと能風よいそぎが來る此間このひまは一精せい出してこい、若もしえけが來そへなら此繩ちわで
えらすぞと、約束やうそくの千尋ちひろの繩、腰こしええ、つかり女房にようばうが、舟端ふねはたを眞逆まっこうさかさま様物もの馴なれ、
えそ身過みすぎなれ繩なはくりこして、舟張ふねはりのくいんよてつ取早とりはやく調サアかゝめ、沖おき
へやつて仕廻しまつた邊あたりへ人ひとなしと口なめずりして上あがつてくる、長太ながたが
そふりゝ氣も付つかず、そんなら世話せわながら今云えやんした癩しやうの藥を、どふ
ぞ早ふと立寄たちよれバ、調調藥やろといふた、うそぞや、待またして置た、いこふせう
爲ためぞやと引ひんだかへ、調調うまい風ふうでは有、此尻しり付つきふふつどのぼつて、いんま
まさがらぬ臍へその動氣はうき、お前の此藥で直ちやうておくれ、たつた一服やくで本復もとがへする
と抱付だきつけバ、ひつえ、よなく、何なんさえやんす、夫おつとの有あわしを捕とらまへ、えやら、
と何ぞやしら、鹽しほだらけな體からだえてゐたえ、たゝるいと突飛つきせバ、夫なんどう
よく、たつた一度いちど、どふもならぬたまらぬと、抱だきえめ、抱えめられ、何と

せんかた渚^{しづみ}の方^{あた}浪^{なみ}間^まへひく鉄棒^{てつぼう}の音^{おと}又^{また}恟^{おどろ}りふり返^{かへ}り、サアなむ三^{さん}所の
 代官^{しろがみ}め、コイヤたまらぬとさしもの悪^{わる}者^{もの}、せふ事^{こと}落^{おち}ふ心を殘^{のこ}し其^{その}儘^{まま}海^{うみ}へづ
 ふくく、こなたに嬉^{うれ}しき此^{この}場^ばの難^{なん}義^ぎ遁^{のがれ}て醫^い者^{しや}へと走^{わしり}行^り、程^{ほど}なく出^でく
 る所の代官^{しろがみ}、鵜^うの目^め鷹^{たか}右衛門^{うゑもん}跡^{あと}から庄屋^{しやうや}が短^{みじ}い羽^は織^{おり}、長^{なが}い鼻毛^{はなげ}を砂^{すな}又^{また}す
 り付^{つけ}、こふならびましたが此^{この}濱^{はま}の組^{ぐみ}の者^{もの}共^{ども}、此^{この}浦^{うら}邊^べの漁^{うし}獵^り師^し男^{おとこ}海^{うみ}人^{ひと}潜^{かづ}
 の蛭^{あま}其^{その}外^{ほか}山^{やま}を持^も獵^{いせ}師^しも入^こ込^こ外^{ほか}商^{しょう}賣^{ばい}のわづか故^{ゆゑ}、惣^{そう}名^なを獵^り師^し町^{まち}とす
 と、聞^きて代官^{しろがみ}打^{うち}點^{ちゆう}き、然^{しか}らば山^{やま}獵^{いせ}師^しも有^あとな浦^{うら}方^{かた}のいふ及^{およ}ばず、山^{やま}獵^{いせ}
 師^しも別^{べつ}してきつとす付^{つけ}る法^{はう}度^どの趣^{おもむき}先^{さき}達^{たち}ても聞^きつらん、鎌倉^{かまくら}鶴^{つる}が岡^{おか}の
 神^{かみ}前^{まへ}もて、千^{せん}羽^はの鶴^{つる}を放^{はな}有^す、則^{すなは}氏^し神^{かみ}のほつかのしめと世^よ又^{また}えらせん其^{その}
 爲^{ため}、金^{かね}の札^{ふだ}を付^{つけ}置^おる、さすれば右^{みぎ}の神^{かみ}鳥^{とり}、何^{いか}國^{くに}の浦^{うら}山^{やま}もありたり共^{ども}必^{かな}鹿^か
 略^{りやく}致^くさぬ様^{よう}とのほ上^{うへ}意^い也^{なり}と、さも緩^{ゆる}怠^{たい}ふ云^い付^{つけ}け睨^{にら}付^{つけ}け、濱^{はま}手^てをさして打^{うち}
 通^{とお}る、跡^{あと}打^{うち}ながめて浦^{うら}の者^{もの}、濟^{すん}だ、お年^{とし}寄^{より}は苦^く勞^{ろう}何^{なん}のくほくら

ふいゑくらうの上の事皆も今のお觸合点か、金の札の付た鶴打事いな
らぬぞや、つるゝ愚おろかこんな時ゝ驚おどろでる必打ぬ様、皆念入れて觸ふふぞや
と打連うちつれてこそ歸りけれ、お谷たにの醫者いしや々とつかゝんと、心も足も磯打浪いそうちなみの中
から出てくる以前の長太、かけ上のぼつてほうと抱だかへ、サア調ゑてやつたさつき
ゝゝ、うまい所を代官めが、うせたでこゝさゝすいりゑたれ、鰯いわしと赤貝あかがい
と口吸くちふておつたを見て、イヤモどふもこたへられぬと、ゑがみ付つかれてお谷たに
ゝゝるさく、サア調ゝまゐコレこゝ爰放はなして、イヤ放はなしたら逝いさんす、慈悲ひぞや情なさけぞや
コレ拜おがむ、いゝどふなりとせうけれど、晝中ひるゝそんな事イヤだんないゝ、爰こゝで
いやなら、海の底そこでつゐづゝゝ、ア、めつそふな、驚おどろかなんどの様にこち
や水へゝゝふはいらぬ、そんなら幸さいはひあゝの舟で、結むすぶの神かみの舟玉様、サアゝこ
つちへお出でゝゝ、エ、こゝや何とする放はなせゝゝ、こちの人文治殿ひとのと呼どさ
けべどかい涙なみだ、コリコリヤなかんすか、泣などゝ別わかして忝かたじけない、可愛男かひいゝや泣なみだ様がち

がふ、足あしをかゝめてゐるのふでまめて、くゝまよがいのくゝ、此この様ようも、ま
 めておくれと、引ひ立たて引ひすり舟ふねの中うち、なんぼ泣ないてもわめいても爰ここの海うみの
 中、其様そのようもびんくゝするといつそこふぢやと舟張ふねばりの千尋ちひろの繩ひもを帶おびま
 つかり、こふして置おてど抱だ付つけぱ、穢けがらしい情なさけないど、身みをもむお谷やが
 帶おびの繩ひも、千尋ちひろの底そこへこたへてや、遙はるかの沖おきへうつほりと浮う上あつたる長太ながたが
 かゝ、遠目とをめも夫それと見る方も逆立さかたち浪なみを立たちおよぎ、其儘まま舟ふねへ飛と上ありすつくと
 立たたる丸裸はだか鱗うろこだらけのさばき髪男かみおとこを引ひすへくゝりし繩ひもどく早はやくお
 谷やの磯いそへ逃に上のぼる、やらじとあせる長太ながたが腰こし褌ふんどし引ひすり廻まわしの結目むすびめも、くゝ
 る千尋ちひろの繩ひもぐるく、夫おつとも向むかつてつく息いきの道成寺だうじやうじを見るほどく七卷ななまきま
 どふて、長太ながた、こつちへおじやと飛込とびこておよげば繩ひもも刎込はねこれ、コリヤどう
 まゐるも聞きべこそ、水みづも強つよき女房めいばうの元氣げんき引ひ立たくゝ、およぎ行ゆ、お谷やの胸むね
 を、撫なおろし立上あらんとする所へ、戻もどりかゝる善知鳥ちんちう、文治ぶんぢ、山々山さんさんさんも獵かりく

らす海部刀の刃を渡る、腰は半弓山衣装お谷の夫と、こちの人、今仕事から戻かへ、今日風が高ふて獵もきかず、山にとふ仕廻ふたれど戻る道で代官殿から鶴のお觸、お宿老へ呼付けられ夫で漸たつた今、チチつさが様子にとふじや、病人をほつて置いてどこへいためつそふな、内ふの隣のお様を頼で置いて薬が切た故醫者殿へ一走、戻る道で惡者の長太めが、夫の、あいつがすだいほうふの誰も難義するげな、其難義で思ひ出した、そなたは悦ばす事が有、ちつさが大病人參でなけれバ、助らぬとお醫者の差圖、あつといふても長々の煩ひ、そなたやおれが物衣類迄賣代なした上なれば、人參買あだてになしと云て大切な人の命、とぞ今一度本復をさしたいと、胸を痛てゐた所聞きや、ちつさを大事くと思ふ、二人が念が届たやら、よい設筋を開出したれば、人參買工面が出る悦びやと、夫の咄しは俱勇夫の嬉しい、そしたらわしの先

へいんで神棚へ燈明上げて、それへおれへ直し其銀の工面へ行、そんなら早ふ戻つてやど、いふ後から文治へ文治待と、云い誰ぞや、おれじや、借錢こいるゝがいやさゝ見ぬ顔せふとい横着者、跡月の日切の銀けさから足の棒と成程いても、とかく内を外が濱獵師町で口利車錢の南兵衛をよふけつしふたな、是へ又南兵衛殿共覺ぬ、不仕合を吞込で借て下さつた日切の銀、片時も早ふと心へやたけ、ちつ共如在のや、いふなへ、銀戻さぬが如在でないか、戻すあてがなかなせかつたど、いがみかかれバ女房分け入、お前様のが皆尤今主のいゝるゝ通り、下地のかいいた其上ゝちつさが煩ひ、やがつぼしめが病を言立、又古手な泣事か、豆板程な涙をこぼして、了簡えていぬ者も有ふが、此南兵衛なんぼでもないなぬへ、今受どう、渡せと立催促し猶手をすり、段々の間違、佛の様な其元も腹が立いで何とせふ、どふぞ長ふといやまい、二三日、

女房共あなたへおわびを、くど上手をかしま脇道へ、交治の其場をは
づし行、南兵衛大ききむくりをまやし、人より息精はらし、はづそふと
横着者一すもやらぬ待あがれ、待かれとかけ出す袂にお谷の取付、
不躰、玄やと思召、お腹の立筈、あの様もせかれすも、ちつと成と精出
して早ふお銀が上たさ、堪忍なされてどうぞ重の云る様も、やかま
しいべりくどよふべるげんさい、よいい、夫程にいふから、違ふ事も
有まい待てやろ、其代銀受取迄、われをおれが内へ連ていぬ、と、夫の、銀
の代は質を取、うせわがれと、引立く、情用捨も荒磯の浪間から又ぬ
つと、首ばつかりで窺ふ長太斯と見るかけ上り、そふいさせぬと南兵
衛が、兩足かいてづでんどう、其間はお谷の引ばづし、廻て行衛の、なかり
けり、ほうくのめも起上り、つよいげんさいめ、もふ廻おつたか、どつ
ちへうせたとさよろ付眼、投おつたの儕、玄やな、金の代は捕へた奴な

せ逃したと、飛かゝつて長太が脇中より廻り、片手もたらぬひ
ばり骨を殺そふより、いかうと、ぐつと指上三端計遙の沖へさんぶと
打込白浪の中からよつこり、南兵衛のあほうよ、海士を浪へ投込だ
へ己が手味噌、陸で己よ叶へねど、海の中で千人力、手並が見たくバ
爰へうせいといひ入れて南兵衛、靨顔、潮の中から吹出し、ちつとこ
ろがな、相手よ、よふ成まいそこで緩りと業さらせと雑言、惡口跡白
波、せんかた渚、まゑだんだ踏、どんな川童め、川へ放す、銀へ得とらず、
あだぶの悪いとふくれ頬、白砂けちらし立歸へる、夕日浪をあらへば、漁
の火かど疑ひる、まだ入相も、遠淺の洲さきよあさる鶴の聲、窺ひ近寄、簀
と笠邊りを見廻し、手元を堅め、切て放せば、拳よ手ごたへさゑつたりと
かけ寄て、はぎ根よ付たる金の札ふつと捻切押戴、かけ出す四方を五
六人、鶴殺の曲者、遁すなく、れと取巻磯邊よ幸の、舟へひらりと飛乗

さそく陸の術も荒磯の浪を、押切くて行方、えらず行末の陸奥の内
の、有と外が濱國の果迎あら磯、狩漁を業として、世を押渡る一村の、
中よも善知鳥安方とて、野山を家と狩あるく、内女房のえはたらと、子
の煩ひに打かしり外、何も煎やう常のどとくよかけ土瓶折焼柴の
くすぼり、えんきをもちやすかせ世帯浦方の年行司用有そふ、門口か
ら文治内、ぬやるかどすつとはいれば、是の年行司の庄右衛門様、よふ
こそお出、連合いたつた今出られましてござります、まあお上りと人愛
も器量に連て愛くろし、亭の留主か、さらば上つてそ娘のお茶、其煮
さつえやるを一ぶく給ふか、よくこしや茶でござんせぬ、こちらの息子
が傷寒でさんく、夫で藥煎じるのでござります、何ぞや小かんじや、そ
しや藥々赤蛙喰さつえやれ、こちらの坊主め、大かんで、様々の藥香して
も直らず、そこで此庄右衛門様の思ひ付、赤蛙十疋計喰したればつい直

つた、大かんでさへぞや、小かんぐらひなら、四五疋喰ひきくしたらつい直る、
 夫いのそふと代官様からの廻り狀まがたま、亭ていが留主るすならこなた見て、奥おくもま
 つかり判はんさまやれど、投出なげだす一通手つうても取て、存ぞんの通私あきめくらの明替あきめくら、苦勞くらうな
 がら讀よみで聞きして下くださりませ、ほんよこなたの無筆むひつぞやの、耻はづかしあが
 らど赤らむ顔かほ、何なんの夫そが耻はづかしい、娘子供むすこが物書ものかきと、彼思かのひより、べくいを
 やりかけおつて、おのづから惡性あくしやうよなるといふて、親おやが教おしぬ、遠國えんごくの
 へんくつ、其様そのようも氣きを付つても、見んごとはじける時分じぶんのはじけおつて、あ
 りやりたし書かたり讀よみだりめんどくさいいつそいもりの黒燒くろやきお藥くすりなん
 どをふりかけて、此庄右衛門様の思おもひ付つ、口叩くちかずとお觸狀ふせう讀よみで聞きそ
 ど押おしひらき、何なんぞや一つと計跡けいせきの讀よみぬ、高たかがかうぞや、此國このくにの殿様とのさま八幡
 太郎様たろうさまが、武運ぶうん長久ちきうの爲ためぞやといふて、鎌倉かまくらとやらで鶴つるを千羽せんば金の札付しるし
 てお放はなしなされたげな、其鶴そのつるが今いまの此國このくにも徘徊はいかいする程ほども、必金かなめの札しるしの

付た鶴を取なと有毎年のお觸こじやいひでも知ての事聞えやれ此
四五日以前、岩城山の麓で、彼金の札の付た鶴を殺した奴が有げな法
度をそむいた科人、夫で國中の嚴しいお尋殊、此浦の殺生人が多よ
つて、格別な詮議がつよい、若殺した者が有なら、早速訴え出し、訴人の者
より、警親兄弟夫婦の中でも、其科を赦し、褒美として黄金十枚下されふ
と有、是の儀亭も殺生好まやが、そんな覺ないかやと、念を入れ
つがもない、この人、限つて何の事、そんな事、必氣づかひなされま
す、そんならよござる、兎角町、い事なかれまや、ひよつと此村、鶴殺
しが有と縛り上て、京三界迄行、いやらぬ、夫がいやさ、念入る、此庄
右衛門様の思ひ付、おかた其内來ませふと、まやべり散して立歸る、お谷
の薬、漸と煎じ仕廻ふて枕元、屏風押明、清童、けさから飯の湯もいかず、
其様、喰す、居と、醫者殿が、呵えやる、此薬香で、からわがみの好の茶粥

の中へ、あも入て焚た程も、梅干も添て、一口くやと母親の詞も漸枕を
上^調イヤ何も喰とふない、コノ唄様とと様もまだ戻らずか、爰が術ないく
と教^{おしゆ}る胸より見る親の胸を痛めて、手を差入^調術ないの道理く、せい
出して藥香だりましくふと、此痛もつる直ると、そろく胸を撫さする、
心づかひの外面も、外が濱の南兵衛とて、よつ程横へふとつた男旅籠履
肩も引かけ、くつわの亭主と思しき者、伴ふてずつとはいり、おかた來た
ぞや、南兵衛が來たぞやと、たまからぐいらつく雷聲、これ病人が
有聲^{ある}びくよいんせと、枕屏風を押立れば、何ぞや病人といふ、がりまか、
なんの役も立ぬやつ、いつそてこねてままやゑいよと、詞でたんのふさ
さぬ氣と、まつてゐてもむつと顔、南兵衛様何ぞやいな、まだ生長有^{おひ}大
事の息子、お前方のお世話も成まいし、構ふて下さんすな、いまく
まいと捻むく姿、何と親方見事でござんすか、イヤ、ござんす所ぞやない、あれ

がそふなら結構な代物、そんなら道々咄した通り、三年切て金五兩、出す共く、合點なら打まゑよか、えやんくも指さきでか、のれ一人が呑込仕事安い物じやぞへ、上方の相場なら、五十兩のふらく、田舎だけで直打がない、コレかた、大儀ながらいて貰ふかい、いいて貰ふかといどこへ何えよ、青森の町へ勤奉公よ、コレ南兵衛殿、仇口にいづもの事と、聞流しよして居れば、付上つて出方だい、あたけがらにいしい勤とい、わしよの善知鳥文治と云、れつきとした男が有ぞや、れつきとした男かして、借た銀をれつきと戻さぬ、もふ催促も仕草臥た、じやよよつてわれを賣の、高が借た銀取の、えや、有がたいと思ふてきりく、いきやいの、但しわしが引立ふかど、無法無恥をどくよりも、戻りかゝつて立聞文治、すつとはいれば悦ぶ女房よふ戻つて下さんした、女子一人とあなどつて、あの南兵衛が、よいいてや、何もかも聞て居る、高が五兩か三兩のめくさ

り金も、女房賣いでも濟事と、落付安方せき立南兵衛、厚いなく、わりや身上が厚いかまらぬが、我等ずんど薄ふ成て、家主のぼんまくられ身上有切籠履一くんの宿なしと成たれば、借た金どらまやならぬ、今といふても銀の有まい、親方、連立ていんで銀受取ふど、お谷か腕引立る、其手を取てもぎ放し、銀戻す受取れど、投出す金の金ながら、ついに見あれぬ金の札、其札の金細工、今潰しても三兩程の金目の有る、それ成と當座の質物、金もさへなる物なら、受取てやらふが、三兩でいまだたらぬ、其不足も、暮合ひ迄の急度濟そふ、暮迄なら間もあゝ事、ゑいゝ待てやらふといふてもぼんなしな里やいんで居る内がない、暮る迄爰の内、居催促、五助、大儀玄や有た休んで貰ふ、いゝそんならもふよとござりますか、親方の役もよつ程氣のはる物、さらばお暇すそふと立出れば、お谷の不審、あの傾城屋といふ、虚言玄やこふしてゆす

らゝや金ゝならぬ、何とよふえた物か、奥へいて一寐入せふ、ぼんまくら
れてきのふからつがすほう、お方飯が出来たら起して下はれ、雜作ついで
ゝ酒も一ぱいのみ取眠のいがみ頬襖押明奥ゝ入、跡ゝ思案有顔の、
夫の傍ゝ差寄て、予こちの人、今南兵衛ゝやらゑやんしたゝありや、何
でござんすと、問かけられて、ありや此間ひらふて來たが、何の役ゝ立
ぬ物と思ひの外結構な金の札、あず入人參代ゝと思ふたれどほんの寶
の差合せゝそんな物ならあいつゝやらすと置たがよい、今さらいふゝ
及ばねど清童の煩ひより、夫婦が着替ゝいふゝ及ばず、諸道具迄も賣拂
ひけふ迄續た人參代、もふあず入る人參の代さへ人に渡して仕廻、何の
力であの子の本復、見殺しゝせうより、南兵衛がいふたを幸、わしを勤
ゝ賣てやり其金で人參を一分ありとたんど入、一日も早ふゝよして下
さんせ、頼むゝといふ内も涙、吞込くもり聲、やくたいもない事いふ

人^こに思ふても見や、以前^{いぜん}の鎗^やも持せた身分、浪人^{なみのり}また迎魂^{むたまし}迄女房賣
ほど穢^{けがれ}もせぬ、氣づかい仕^しやんな人參代もどふから工面^{くめん}えて置たど、す
つと立て膳^{ぜん}の隅^{すみ}からかろす硯箱^{すゐり}、縁^{ゆかり}にかけても放^{はな}れても昔^{むかし}えみ込^{すみ}墨^{すみ}
の折^をゆがまぬ武士^{ぶし}の達筆^{たつびつ}も、さら／＼と書^か認^め、^開お谷^や、大儀^{たいぎ}ながら此一
通^{つう}、代官^{だいぐわん}所迄^{しよ}持^もていきや、^ウ此書^{このしよ}た物を代官^{だいぐわん}所へ持^もていけといへ、^サ夫^そを
代官^{だいぐわん}所へ持^もて行^ゆと大分^{おほぶん}の金^{かね}がくる、^よそとや又^{また}どふして、^サ今^{いま}展^まる道^{みち}で
聞^きべ、鶴^{つる}を殺^{ころ}した者を訴^こ人^{にん}すると、褒美^{ほうび}の黄^{わう}金^{きん}十枚^{じふまい}どの噂^{うわさ}、其^{その}鶴^{つる}を殺^{ころ}した
者を、わしがよふ知^してゐるよ、つて夫^そでわがみを訴^こ人^{にん}よやるのぞや、^エい
お前^{まへ}も日比^{ひひ}の氣^きも似合^{にあ}ぬ、嗜^{しよ}えやんせ、人の惡事^{あくじ}を訴^こ人^{にん}え、褒美^{ほうび}も賞^{しょう}ふ
た其^{その}金^{かね}で、どんな藥^{くすり}を吞^のした迎^{むか}何^{なん}のきこふぞ、本復^{ほんふく}せふぞ、恐^{おそ}しい事^{こと}工^{たく}す
共^{とも}、やつぱりわしを勤奉^{つとめ}公^{こう}、親^{おや}いなし兄弟^{けいだい}持^もたずお前^{まへ}さへ合點^{がてん}なりや、誰^{たれ}
が點^{てん}の打^{うち}人^{にん}ない、聞^き分^{ぶん}て下^{くだ}さんせとすが、^お歎^{なげ}けはて扱^{あつか}、役^{やく}も立^たぬ

事いゝすと早いさや、わし玄や迎人の命何の訴人がしたからふ、けれ共
是計の訴人玄ても大事な奴、太事あいつそ里やまあどこの、外
でない奥又居るあの南兵衛、す里やあの南兵衛が、聲が高い、ほん
の是が厄病の神で敵とやら、あいつなら少くこちらから金出してなと
訴人のしたい悪者、そんならわしの一走りてくる程、どこもかもよふ
えめて、取にがさぬ様として置えやんせと小づま引上いそぐと、代官
所へと急行夫の奥、氣をくばり、そろ／＼ひらく佛壇の、佛の箔の光り
さへ薄き櫛の花抹香撞木取出した／＼き鉦なまいだ／＼／＼聲も幽み、
ど／＼様やか／＼様いどこゑや、爰が術ない／＼と、苦しむ聲又鉦打やめ、
ど／＼爰にゐる、臍もおつ付戻るが薬でも舂たいか、薬のいやじや
／＼ど／＼様、必どこへもいて下さんなや、お前が留主あらかりや淋しい、ま、
氣づかひすあどつこへもいきやせぬ、／＼と口よいいへど心よい、鶴を

殺した科故^{とが}も今縛^{しば}られて行共^{いっしょ}しらず、我^{われ}を慕^{した}ふ志^{こころざし}可愛^{かあい}の者やいぢらし
やと思へば胸^{むね}も張^{はり}さける涙^{なみだ}隠^{かく}して、清童^{きよどう}どしどこへもいきやせね
どあ、もし用^{もち}が有^あて代官所^{しろ}から呼^よぶ來ると行にやならぬ、其時必^{かならず}泣^ななよ、
どふぞ早^{はや}ふまめも成^なてな、と、今看經^{かんきん}するの大事^{だいじ}のお主^{しゅ}、其主^{しゅ}の名を
覺^{おぼ}て大^{おほ}きう成^なる迄^{まで}忘れあよ、又佛壇^{ぶつだん}も指^{さし}向^{むか}ひなむ、俗名^{ぞくめい}安倍^{あべ}大夫^{だふ}頼時^{よりとき}
公^{こう}家臣^{かしん}鳥海^{とりうみ}の前司^{ぜんじ}安秀^{やすひで}が一子^{いっし}、同名^{どうめい}文治^{ぶんぢ}安方^{やすかた}、今生^{こんじやう}よての回向^{かいかう}の仕納^{しなめ}め、
南無阿彌陀佛^{なむあみだぶつ}、く、此殿^{このいまだい}未^{まだ}在世^{せい}の時^{とき}、斯^{かく}やす我^{われ}と迄^{まで}俱^{とも}な榮花^{えいぎわ}もほこ
りしが、いかなれば武運^{ぶうん}拙^{つた}く八幡太郎義家^{はつぱんたろうぎけ}が計畧^{けいりやく}の矢先^{やせん}もかゝり、世
を去^さり給^{たま}ひし其月日^{つきひ}、則^{すなは}今月今日^{こんげつこんにち}が父頼時^{ちちよりとき}の十三回忌^{くわいぎ}、法名^{ほうめい}大了院^{だうりょういん}
殿喜山^{でんきざん}大居士^{だいこじ}出離^{しゅつり}生處^{しやうじ}頼生^{らいしやう}菩提^{ぼだい}と唱^{とな}ふる聲^{こゑ}も立寄^{たちよ}て障子^{しやうじ}ひらけば南
兵衛^{べいゑ}が姿^{すがた}の素袍^{すほう}立^たるぼし一つの位牌^{ゐはい}を上座^{じやうざ}も直^なし合掌^{がっしやう}したる有様^{しやうじ}の
興^{きやう}さめてこそ見^みへよけれ、又治^ちのふしぎの膝立^{ひざだ}直^なし、頼時公^{らいときこう}を父上^{ちちじやう}と

心得ぬ今の詞子細いがと尋ねれば、不審尤合戦の砌迄にまだ部屋
住の共方、我面體を見えらぬに理り至極、鳥海の城郭にて人となりし、安
倍三郎宗任と聞か方方々、はつと飛えさり頭をたれて平伏す、宗任素
袍の異儀繕ひ、只今もやごとく、今日父が忌日と當れば、平人の形で回向
すすも云がいなく、暫く昔より立歸る我心は、是より直に都より上り、折を待て
父が仇、八幡太郎義家を討ちとらんず軍の門出、尤成るに思立、猶も
は心勵す一條、父安倍頼時公、栗坂の合戦、討死有し其時、兄貞任
と諸共、衣川の城内にて、軍の次第逐一より上げしに、我父前司安秀、其
身も深手老の身の、栗坂より引返し、軍難義と見へ、早く此城落給へ早と
くくと進る月日いかなる悪日、天喜五年九月五日、其光陰も三つ
葉のそや流矢來つて我父の綿醫のはづれより骨を碎てむづと立、急所の
痛手より勇氣もくじけ、ついよ其手で果給ふ、大將死すれば家の子郎等親

子兄弟ちりぐゝ妻は別れ子をふり捨兄、貞任の行方迄白浪寄る、浦へ
嶋へ早義家が領地となれば、廣い世界は此體置所さへ夏木立、木もか
やにも油斷せぬ身と成果る其無念、腦を貫き腸を斷といへ共、時來らね
ば十三年、仇は戴く天の谷磐石と成て五體を碎く父の怨、追付討て尊靈
へ手向の追福仕らんと、初めて明す南兵衛が、氏も系圖も陸奥も並ぶ方
あき、勇氣の大將、適なるは心底、其は物語が直は追善喜山大居士安樂
國南無阿彌陀佛と回向の中、表へ誰か人音は先暫くと間の襖、指心得て
待所へ、斯共えらず女房の、褒美の金は氣もいさみ、心も足もいそぐと、
サシく金貰ふて來た、代官様のおつえやるより、追付捕人を遣す程は、先
へいんで取逃さぬ様はせいとの云付、もふ爰へ見へるである、南兵衛の
逃にせぬか、こふいふ中も油斷がならぬ、早ふ來て、ちやつと縛つて下さ
れいでも見やる表へ、捕人の大勢、門口を大音上、岩城山の麓はかいて鶴

を殺せし大罪人、此家の主善知鳥安方と、女房が訴人よりよつて召捕り
向ふたり、尋常より縄かゝれど、呼べる聲より文治安方顯れし上り隠す
詮なし、お尋の鶴殺し縄かけて引れよと、夫の覺悟よりお谷が胸よりこそ
や、何をいふの玄やいの、鶴殺し奥よりあるま、南兵衛といふた偽り
そちを訴人よりやらふ計り、岩城山の麓より鶴を殺し、金の札を取たる
此安方よりすりや今わしが持っていた訴狀も、自分の科を自分の白狀、
そんならわしが無筆故夫でだましてやつたの玄やの、ハハはつと計り伏
轉び十方、涙よくれけるが、扱もく世の中より物書ぬ身の上程つらい悲
しい物有ふか、連添男の身の科を書記た物共えらず、悦びいさみ代官所
へ持っていた何事ぞ、せめていろはを讀程成と此目が明て有ならバ、何
のいこふぞ、無筆と知てこふいふ使よりやつたわしを世の人の、物か
ぬ身の見せしめよなれといふのか文治殿、そぞやあんまりどうよくな

むこい難^{つれ}面^{おもて}心^{こころ}やと正^{ただ}体^{てい}涙^{なみだ}又^{また}伏^ふ沉^{しづ}む夫^{おつと}も不^{びん}便^{べん}の涙^{なみだ}を拂^{はら}ひ、其^{その}恨^{うらみ}も尤^なな
がら、何^{なん}事^じも定^{さだ}まる業^{ごう}と諦^{あきらめ}て、清^{きよ}童^{どう}を随^ず分^{ぶん}大^{だい}事^じは、彼^{かの}人^{ひと}へ頼^{たの}置^み事^{こと}是^{こゝ}迄^{まで}、
サア繩^{なは}か^かけて引^ひれよと、詞^{ことば}は猶^{なほ}豫^よも捕^と手^ての役^{やく}人^{にん}、神^{しん}妙^{みょう}なりと立^た寄^よて、か
る繩^{なは}目^めは取^と付^けてお谷^やが泣^な聲^{こゑ}清^{きよ}童^{どう}が屏^{びん}風^{ふう}力^{りき}は延^{のび}上^あり、^詞アレどく様^{さま}が縛^{しば}られ
て玄^{くろ}や、詫^わ言^{こと}えて下^{くだ}されど、いふ聲^{こゑ}俱^{みな}は屏^{びん}風^{ふう}もばつたり落^{おち}入^い我^{われ}子^こ、^詞これ
清^{きよ}童^{どう}が死^しぬいの、^詞コレのふ是^{こゝ}どうろつく女^を房^{ぼう}、繩^{なは}付^けながら夫^{おつと}もうろく、
^詞コリヤ清^{きよ}童^{どう}必^{かならず}死^しでくれるなよ、われを助^{たす}ふばつかりよ此^{こゝ}どくが命^{いのち}を捨^する、^詞コリヤ
氣^きを付^{つけ}よ清^{きよ}童^{どう}清^{きよ}童^{どう}やい清^{きよ}童^{どう}いのだ呼^{よべ}ど、さけべど息^{いき}絶^たて、其^{その}かいらよ
泣^なたをれ、けふいにか成^{なる}日^ひ成^{なる}ぞや、我^{われ}子^こは離^{はな}れ夫^{おつと}は別^{わか}れ、一^{ひと}人^{にん}残^{のこ}つてそも
やそもあられふ物^{もの}か淺^あましやと、妻^{つま}が歎^{なげ}け夫^{おつと}の猶^{なほ}涙^{なみだ}はむせぶ聲^{こゑ}を上^あ、^詞四
百^{ひゃく}病^{びょう}の煩^{わづら}ひより貧^{ひん}程^{ほど}つらい物^{もの}有^あるか、我^{われ}子^こは吞^{のま}す人^{ひと}參^{まゐ}の價^{あたい}はせんと
鶴^{つる}を打^う、其^{その}鶴^{つる}故^{ゆゑ}は我^{われ}命^{いのち}取^とるのみか子^こも死^しる、思^{おも}へば是^{こゝ}迄^{まで}多^{おほ}くの殺^{ころ}生^{せい}敷^き

多の鳥を殺す中にもまだ巢離れもせぬ小鳥を、育ん爲は親鳥の野山も
かりて餌を尋る、夫共乏らず親鳥を殺せば残りし子鳥も死る、まづ其如
く我も子を助ん迎此親が死れば残りし子も死る、歴然報ふ因果の
道理、親故不便な死をさすか、こらへてくれ赦してくれ、としも追付行程
も、六道の辻で必待て居てくれよと、跡や枕も取付て、夫婦の前後正體も
取亂し、たる計なり、捕手の哀よそ目も見なし、未練の歎も時移ると、立
寄て引立れ、是非も縄めも恥ぢめられ、まほくとして立上る、コレのふ
暫しと女房が寄を突退するを拂ひ、前後厳しく取まく人数、お役人
先づ待た、鶴殺しの科人の是も有人違はしせらるゝなど、聲をかけて南
兵衛が一間を出れば捕手の頭、自分の白狀もよつて縄かけし善知鳥
安方、其外の科人とい紛ひしき胡乱者、但し鶴を殺したる證據有てか何
どく、證據の則これ爰も、投出したる金の札鶴が岡の神前もい

て、八幡太郎是を放つとゑり付し金の札、其札を所持するからの紛れも
 ない鶴殺し、科ない者を縛らず共繩といて某を、早く都へ引れよ、思ひ
 がけあき一言を、聞より文治氣をいらち、いねぬ我をかへ立証據
 が有ふが有まいが科人の此文治証據が有べ鶴殺し、此南兵衛、某
 と、あらそふ二人を制する捕手慥なる証據有べ科人の南兵衛も極る、此
 上の善知鳥がいましめ、はやとくく、と南兵衛も、かけ替つたる縛り繩、
 といつ迄も此文治家來の替りも主人と、云を打けし、鶴殺しとな
 つて都へ引れ、八幡太郎も見參せよそれこそ日頃の願成就合點か、目
 ませよはつと心付、そりや所存有て、會稽、今此時、それ無用
 の振舞、たとへ再會の期に有共身うごきあらぬ其いましめ、何の是えき、
 警鉄の鎖を以て繫ぐ共、我爲にわらえべ同前、一念頭よと、まつて本
 意を遂し眉間尺、口も劔のふくまず共、一心のねた刃を合さば何條事の

有べきぞ、心得たるか安方と、身を鎖石てつせきよかためたる詞ことばも善知鳥ちとも詮方
なく、たとへ繩目つなめの助かつて、存命ならずと肌はだくつろげ、山刀やまばち拔放ぬきはなせば
このそもいかいと止むる女房、南兵衛聲かけ何故なんげの切腹せつぷく、子細こさいばし有
ての事かど問かけられて、涙を流し今いまの何をか包つつみさん只今死せし悴せがれ
とやすの我われ夫婦が子こあらず、三代さんだい相恩さうおんの主人しゅじんより預あづかりし大事だいじの
輪子わこ、は大病だいびょうの介抱かいぼうも心こころに任せね身貧みんの某たれ、此後主人このちのしゅじんあめぐり逢あはべ何と
云いひ譯わけ有べきぞ、只切腹せきふくをば用捨ようしやどおつ取刀とりとう踏落ふみおとし、うろたへたるたわ
け者、たとへ我兄われあに、それ我が兄あにの子、名なの清童子きよどうじといふよもせよ定まる命
の力ちから及およばぬ、一人ひとりあても味方あてを招まねく今此時、犬死いぬしえて忠義ちゅうぎなるか、死
るよも死しれぬ命いのち、まさかの時迄汝きみも預ける、いざお役人やくにんは苦勞くらうながら
と、いさむ繩付つなづえはるし善知鳥ちと、妻つまの泣なみく野邊のへ送り、何營いんぐさもなきがら、
子で子こあらず郭公くわくこう泣聲なきこゑおいつて血ちを吐はく鳥親とりおやも傍そばよて血ちの涙なみだふらせ

べお谷がすが簀や、死骸を覆ふ隠れ笠隠れあらざる弓取の、其は種共お
 主共いふよいねれぬ苦しさい、鴛鴦を殺せし科やらん、善知鳥の返つて
 生残り、我の擒と成たるも敵を欺く氣の大鳥、追付天下は羽うつ鳥、數々
 鳥の報ひを爰は、陸奥の外が濱なる善知鳥の宮、安方町と名も高き古跡
 へ、今も残りける

○第三

さればよや少將の、百夜通へど夕闇の笠もふる雪つもる雪戀の重荷の
 朱雀道七條堤の、飯橋は、盲女の引語り、綴の中の秘藏娘、十斗なが手を出
 して、右や左の道通り西の九州さつまがた鬼界が島の果迄もわしや行
 氣ぢやよ去どて、花の都は袖乞と成て住こそ是非なけれ、王城の地の
 物囉ひもつれさつぱり月代天窓どふぢやめくのお袖よい囉が有そ
 ふなの、かさの次郎殿か今夜の闇で人通り少し北風の吹付る手が

はぢかんで、三味線も引れるこつちやない、何をせいらしい、寒の中又涼
むのがわがみの渡世^{とせい}玄やないかいの、がりまいいねむりやせんかよ、商
賣^{ばい}もおよそな奴^{やつ}でい有、チ、イどいつじや、ム、どんどここの九助今仕廻ふたか、
設^{しやけ}るなく、いとんとこも初手^{しよて}に取た物じやが、せんぐり又新物^{しんぶつ}が出て
とんと衰微^{すいび}もふ今の町中がお長め又喰付切た、まだどふいふても角を
絶^たさぬ奴^{やつ}の佐野源左衛門、あいつ一株^{かず}じや、玄たがわりや、よい設^{しやけ}が有か
して、見里や、立派^{りつぱ}な御座をかぶつて、はでな形^{かたち}するな、いやもふこいつ
もつめたふて悪い物やい、ほんの見てくればつかかり玄やない、色取るな
く、ホ、ほんに夫も一盛^{ひと盛り}、こちらに此子一人^{ひとり}が樂しみ、去年迄に相應^{さうおう}又一
重^{おも}の物でも縫^{ぬい}て着せたが、此春から内障^{うちひ}又成俄盲^{なにかめくら}で娘又介抱^{かいほう}受る身の
上^{うへ}、行先^{ゆくさき}を思ひ廻^{まわ}せば夜の目も合ず、今日^{けふ}のお君が誕生^{たんじやうび}日こんな中でも
大事^{だいじ}の身祝^{みいは}ひこな様方^{さまかた}とも祝ふて貰^{もら}えと酒も小屋又買^{かう}て置た、したが

あの六殿いんよ、いさたなしぢやぞや、き、あいつふ吞のしたら一升や二升のつゝ
ゐころりと、人事ひとごといひ、廷迄てい、吞上る非人ひにんの六、諸方しよはうのしたみ又目のす
りふくれ返かへつた、腹立上戸はらたち、けたいじやぞ、げんさいの傍そばよべらゝどお
けよ、又六めかゑらふ引てうせたな、あいつゑい得意ごういを持つて、瀆脇はつわき
の料理茶やで、酒肴さかあの喰飽あきえゐる、サ、夫がけたいじやお、りや業わざがわいて
ならん、い、けふも川作の屋敷振廻よろまひ喰て來たが、惣体そうたい近年茶屋方の料理
が粹過すいすぎておれが口ふ合ぬ、夫で腹が立が無理か、そいで大道掃はひの犬追いぬおの
ど、下男か何ぞの様ふつかひくさる、是でいもふ乞食こじきもやめよやならぬ、
「リヤ」お君よ、おぢが風車かざぐるま買てやろがゑらいか、おりやもふわれが、いひ
てゝ腹が立、い、サ、もふこちの娘が、い、いゝのが何の腹の立事で、腹
が立、いじや、コレあめく、一鉢ひとありやわがみの器量きりやうのゑいのが腹が立、乞食こじき
だてらそんな美うつくしい顔が、どこよ有物じや、無理むりか、むりならどいつでも

相手^{あひて}ぞやと、くたまく聲も酒草原^{さか}、踏^ふ分け來^{きた}る瓜割^{うりわり}四郎、ソレ今^{いま}のお侍^{さむらい}様々
と二人が犬蹲^{つぐは}い、非人^{ひじん}共^{とも}が最前^{さいぜん}云^いた生駒^{なまがけ}之助^{のすけ}、傾城^{けいせい}戀絹^{こいぬ}取^と逃^{にが}したか、何と
何と、サア、晝^{ひる}ちよつと眼^{がん}ばりましたれど先^{まづ}もさぶなりやめつそう、又
かしられず、幸^{さいは}ひ爰^{こゝ}もある六^むといふやつ、酒くらふとあほう力^{ちから}、こい
又仕事^{しごと}さしませう、六^むよ、爰^{こゝ}へこい、又存在^{えんざい}な脚^{すね}投^な出^でして辭義^{じぎ}をあれや
い、いやぞや、おりや茶^{ちや}の料理^{りやうり}人^{にん}より外^{ぐわい}は腰^{こし}かゝめた事^{こと}がない、イヤよふ
聞^きけ、其^{その}二人のやつおいらがいてぐずりかけて爰^{こゝ}へおこす、われが爰^{こゝ}
又待^{まち}伏^{ふせ}して居^ゐて、男^{おとこ}めをぶちのめす、そこでげんさいをあなたへ渡^{わた}すと、
は褒^{ほう}美^びよきす、存^{ぞん}分^{ぶん}、あなた^{あなた}の振廻^{ふるまひ}吞^の込^{こん}だか、酒^{さけ}吞^のすか、嘘^{うそ}ぞやないか
よ、コレ殿^{だん}様^{さん}、そんなら酒^{さけ}の方^{かた}を先^{まづ}へせうかい、イヤ、あの上^{うへ}吞^のす、と本^{ほん}たに
いふ成^{なり}ります、六^むとやら、おふせた跡^{あと}で吞^の喰^く、わが望^{のぞ}次^し第^{だい}酒^{さけ}に
伊^い丹^{たん}の薦^{いも}かぶり、差^さ合^{あひ}云^いはるな、こりや鹿^そ相^{さう}、着^{さか}、餓^う汁^じ夫^も差^さ合^{あひ}餓^う汁^じに

おれが同行中ぢやと、横よこふくれた腹はら鼓咽つゝみのどをならして、別れ行、もふ人通
 りもあさそふな、仕廻しまわふて休サアも君と、親子かたへの小屋こやの中、鳥のふ
 しど、隣同士となりどし、露にこを荷にひら、乗物釣つせ、源家の妹八重やね、幡姫はた、こなたの土手を
 眞直まっすぐふ、平倅杖へいけんぢやう、直方互ちかひたひふ、行合挑燈てうちんの、紋もん又見またみえりの一家中、是こゝは八重
 幡殿夜中はただやちゆう又何國いづくへ、ちど心願こころがねの事有あて、神詣かみゆきか、歩あづから殊勝しゆせうく、と挨あ
 撥半さつちかば、生駒之助なまがけのすけの戀絹こいぬが手を引漸火やうくかげを目宛あて、狼藉らうせき者又出合難義致であひがたがたがたす、
 憚はやかりながら此女このをんなを暫しばしが間まお預ありど、差出さしだす挑燈てうちん、恸びつくり廻行めぐりを、倅杖けんぢやう目早
 くコリヤ若者わかし、わりや道みち又迷まよふたな、爰みよこみよこに京城中きやうちゆうぢゆうが闇くらいから、人の誠まことの本海
 道みちの行ゆかずして、色いろの道みち又迷まよふて居ゐるお、火しを借かつてどつくりと、心の闇くら
 を見たり見せたり、身共みどもに老人猶いまだ以もて何なんも見へぬ、よし見へても、八重
 幡殿はただどい一家いけの中ちゆう、急きふの用事もちがひ早参ささるると、はづす老幼粹親仁らうしゆすいしん、秘下ひしも部ぶさし心
 得しる、一人も残のこらずばらくと氣きを通とされても濟すまぬ中、わざと懇懃こんしん三ッ指ゆび

よ、先以て姫君様、は安體あんたいの尊願そんがんを拜はいし恐悅きやうえつ至極しごくと相述のりるぞ、そふいやる
の無理ならず、またがもふ其様又氣を置いて下さんぞ、わえやふつゝりと
思ひ諦心あきらめの髪かみの切きて居る、ハテ思ひ合あた中を引分ひきわけ添そふて何の本望殊もとぞ又兄上
のお媒遊まかいした戀絹殿中よふ添そふて其代り、未來みらいの縁を、詞どふぞ頼たのまする
夫婦の衆しうど、思ひ切きての中く、よ見向もやらぬ、心根又戀絹も恥はぢ入はて勿
体ないないく、夫を聞てゐわたしが方から思ひ切き共ともすされぬ、ひよんな
物を身よやどし、退ひれぬ惡縁ゑん、そんなら詞よあまへて、は大事の
物なれど此世のわたし詞が借分かりぶん、來世でいさつと詞お歸しすする其證據しやうこ
ちよつと爰で詞祝言しうげんの詞盃さかづきがさせましたいが、どうがなど案あんずれ、
其詞お盃さかづき私わたくしか差上げましたしよ、小屋の簾すだれを押上おてさぐる、目病めやまひのすり足、
縁縁も欠かけたる三方土器かたはらけつぎ綴つぎれの上の襦うちかけ、やれても昔床ゆかしげ、詞どなたか
存ぞんませぬが、最前さいぜんから詞尤なせつない戀のお咄私おつとも子細おつか有あて夫又飽あかぬ

別れをせし者、身は引當ておいとほく、つゞれの袖をまぼりしぞや、
 様はやさば賤しいきたない非人めが穢らひしい共思ふが私とても
 まんざら前からこふした身でもござりませぬ、今日の此ちいさいやつ
 が誕生日、昔を思ひ出して調へし九献鬘斗毘布心計りの身祝ひ、幸ひの
 折からと慮外を忘れたお媒、お君、致して置た祝言の長柄お酌やと
 挨拶は姫君嬉しく盃の、底意晴たる取結び、さいつさくれつ酌かいた、待
 ぶせえたる非人の六酒の匂ひをかぐよりも、以前の仕込に忘れて仕廻
 はやく、笑顔もみ手えて、お、おめでたいは祝言、私もお取持もちつと
 お間、お酌はへとかけ茶碗息なしと咽さく、結搆な酒でござり
 まする、旦那、慮外やまする着、爰は有山の面桶の底から鯛の足、イヤ
 過分なが身の精進そんなら私祝ふて最一つ下さりませよ、お家様上げ
 ままよか、おいやかそんならも一つ下さりませよ、お寮人様もおいやか、

そんなら我等も一つとほつとする程續吞、戀絹が替つてお酌、イヤ、見
苦しく共やつぱりあれ、娘が生長あなた方、あやかり、よい殿持て
祝言を、わたりとゑたとが、非人乞食の身の上で、何の祝言所と嘸ふ
笑ひなされふ、思へば、浅ましい身の上、是れゑたり、大事のめでたい
は祝言、ついで涙が、私も祝ふて、君の千代ませく、と、くり言を祝ひ歌の、
面白の時代や、おめでたや、祝ふ付けて我娘も、昔の身ならお乳め
のと、對待十炷香、藝づくし、教も覺もせう物を、ろくな事でも教るか、橋の
上の乞食の娘、誰が嫁も取てくれふ、待の種を受ながら、町人百姓も
縁付の、ならぬ、何の報ひぞと昔を、忍ぶ悔泣、身まつまされて三人もい
としや道理と俱、涙六も數献の持こし、囉涙のかい作、どふやら酒が裏
ふ入て、おれも悲しい、とゑやくり、上たる折から、かけ来る次郎七
九助、六何して居る、さりとゑかけて疊でゑまへ、後詰、いはいら

がある早ふくとせり立れば、ないじやくり、次郎七か、九助か、そ、わいら
ゐる機嫌じやな、お里やさつきよから哀な咄しを聞て、泣てばつかり
居るゐいやい、わいらも、そ、あなた方の形を見、雛様のやうなお姫様が
酒買錢がないやら、乞食又酒を振舞れ、せめて天目でも有事か、啜わる様
な盃又酒ならたつた一升で誤つてござる心根が、思ひやられておいと
しいと涙と、俱又とぶく、いまく、えい又喰ふたな、其酒こちへど
たくりよか、くれ、夫からほらうじませう、どなたでもどいつでも、
旦那衆も手向ふやつらおれが相手と尻引からげかこふたり、どつこい
やらぬ乞食又差合囉ふてこませと兩方から、取付つゝれの破かぶれ、
うぬらの世界の餘り物、命の高けんて取、ころく、轉び逃行を酒は任
せて追て行、向ふは數多の人音のゆく、今の侍がくるので有ふ、ちつと
の間わたしが小屋へと二人を、伴ひ入間もなく、血眼も成て瓜割四郎、ど

つちへうせたど家來もまどろ、まべしくと儼枝直方、コレサ四郎あいたゞ
しい面色、先何を詮議めさるゝと尋られて、何其儀の貴公も此程は吟
味なさるゝ宮を奪ひし曲者、草をわかつて詮議せよと主人が云付姫君
も是よふ渡り、此小屋が物くさいと家來共、非人め出ませい出から
ふと呼れておづ／＼、這出るつゝと出からふ、いまだ出おろふ、頬上い
と突付る箱挑燈の火明り、老眼も見違ぬ、絶て久しき我娘、ハッはつと
計仰天ながら聲をくろめ、此小屋の非人のわれか、非人ぞやよな儼
もよもや腹からの乞食共見へぬ、町人か但の武士の娘か、推量の通
成下つたの若氣の誤り、清水詣の折から、東國方の浪人と不圖馴初種を
嬢して是非なき家出、其夫もあふぎの別れ、はいはてな、ヤアと云ふ
手間で、うぬが親夫の名をぬかせ、い夫ばかりいどふもあせ／＼、名を
中程不孝の上ぬり、此身こそかう成たれ、親の名を出すまいと晝の袖乞

ら得致さぬ、せめてもの中譯わけ、尤そふ有ふ、今の其心底しんていを、誠の親が聞
 ならべと我名の云ぬけん、玄やう向千むさちとふ心ぞこもりける、彌や以て胡
 亂者らん、まだ隠して有やつが有ふ、直すに詮議せんぎと立寄鑑たよりえつかと取てお待まちち
 やれ四郎、宮みやを奪うばひしやつの詮議せんぎお身の頼たのまぬ身共がする、横合よこあから
 つかい世話せわ、但老人でかやうの吟味ぎんみも得せまいと思ふてか推參すいさん至極ごくと
 きめ付けられ、これこれ、まつびらに赦免しやめんいやもふ拙者せつしやも一門
 の家來けらいなれば、只今の心こころ安立やすだて、一姫君いひぎみももふお立お供廻どもさばりいどつ
 ちへうせた參れ、と脇道わきみちへ、カンニそれ、自みづから、夜の更ふけぬ内歸うちかへるがよ
 う、此間まちやつと行がよかろとえらせの謎なぞ、お袖が小屋の後うしろから、押や
 る主從しゆくい妹脊いもせの別れ、親子のわかれ、子このえらで親の思ひの闇深やみふかき、餘杖ゆんじやう
 が等郎ちやうらうあいたくしく、只今大江、維時これとき公きみ、宮みやの詮議せんぎ何故なぞ又遅おそなる、日
 延ひのびの時刻じこくも一日いちにちよせまる尋出ひもとすか切腹せつぷく有か、二つ一つの返事へんじ有べし

との事也、ナニ維時が使^{つか}とあ、直^{ただ}逢^あて返^{へん}答^{とう}せん、供^くせよ彌^や惣^{そう}太^た挑^て燈^{とう}もて
と夕嵐^{ゆがき}、鐘^{かね}もときつく、八重^{やよひ}幡^{はた}姫^{ひめ}、儼^{げん}杖^{じやう}様^{やう}の一大^{いちだい}事^じ、氣^き遣^やひしや、家^け來^{らい}共^{ども}乗^{のり}
物^{もの}參^{まゐ}れど、呼^よひる聲^{こゑ}、お袖^{そで}が聞^き付^{つけ}ゆく、儼^{げん}杖^{じやう}様^{やう}とい平^{へい}儼^{げん}杖^{じやう}、直^{ただ}方^{ほう}様^{やう}でいご
ざりませぬか、夫^{それ}聞^きて何^{なん}もする、アそん、なら今^{いま}のが、コレ、一^{いち}大^{だい}事^じ、とい何^{なん}
の譯^{わけ}、ちよつと聞^きして、面^{めん}倒^{たう}など突^つ飛^ひし、乗^{のり}物^{もの}いそげと四^し郎^{らう}が逸^{いっ}參^{さん}慈^じ悲^ひ
も、白^{しろ}砂^{すな}ころく、ころぶ蘆^{あし}邊^べの濱^{はま}千^{せん}鳥^{ちょう}嵐^{らん}も髪^{かみ}もばらく、親^{おや}子^こ
手^てを取^と雪^{ゆき}の足^{あし}跡^{あと}を、またふて、たどり行^い、心^{こゝろ}の内^{うち}こそ哀^{あは}れ、平^{へい}儼^{げん}杖^{じやう}直^{ただ}方^{ほう}環^{たまま}
の宮^{みや}の行^い衛^ゑ知^ちぬ筑^{つく}紫^しのほととぎす、夏^{あつ}去^き冬^{ふゆ}のいつしか、すで今年^{ことし}
の日の數^{かず}も、春^{はる}待^{まち}計^{けい}枯^か殘^{ざん}り、枯^か果^{くわ}る庭^{にわ}の檜^ひ皮^{わだ}ぶき落^お葉^はの軒^{のき}とふきかへて、
嚴^{げん}守^{しゅ}の女^{をんな}中^{なかつ}仕^{して}丁^{てい}もなく、老^{らう}の忠^{ちゅう}義^ぎの一^{いち}筋^{しん}も、竹^{たけ}の園^{その}生^ふの傳^{かづ}も、つもる白^{しろ}髪^{かみ}
も雪^{ゆき}折^おれて妻^{つま}の濱^{はま}ゆふ只^{ただ}二^{ふた}人^{にん}、夫^お婦^ふの女^{をんな}なん、いまそかりける、椽^{せん}先^{さき}も立^た
出^でなふ嚴^{げん}、お年^{とし}寄^よの雪^{ゆき}ふりも、庭^{にわ}へ出^でて何^{なん}なさる、寒^{かん}氣^きが入^いふもふか

はいり、ちと火又お寄ときり炭のせうも成迄、女夫合めらこへ宮様行方なく
成給へば、此は所の明屋敷、我々夫婦が个様もは番に致せ共、肝心の主あ
ければ、玉のほ殿も鳥の塙と成果、今日なども宮おにしめますあらば、仕丁
共は木の葉の雪を拂ひせて、は遊びなされう物をと、不圖思ひ出して子
供の眞似する雪なふり、天地の中もさへましまさば、奪ひ返して此耻辱
すゝがん物と、心の雲も入たけれど、都の中を身動きならねば、空しく
胸をいる計り、不便な娘敷妙、日本の智者と呼るゝ、八幡殿も連添あが
ら、不覺を取た此親故、夫の手前も耻しく、嚙肩身がすばらふとそも此春
の一夜さも、實もねた夜のあやらぬと奥齒もれくるまばら聲、よこ
ざりますいのの弓取の不覺といふ軍の中の臆病、こりやほんの災難
敷妙が事おつえやるも付て、思ひ出す姉娘の袖袂親もえらさず忍
び男を捨て家出、憎いやつと思ふたも早一昔、其時のまだ十六の跡先な

し、年も行たれバ、嗚、今頃、悔しう思ふてゐるであらう、どこようろたへ居る事ぞ、又姉めが事々どくと、思ひ出すも穢しい、不孝者といふか、武士の家の不義放埒、再び頬も見まじと思ひしよ、まだ業が見てぬや、朱雀堤の橋の上で、橋の上で何と云たへ、いや何共せぬ、たとへ橋の上で、のたれ死えおらふが不便な共思ひぬ、お身、又何とぞ思ふ氣か、い、何とも存ませぬ、身共、結句、心地よく思ふ、いと、口、憎て、い、身を背け、物事、つまぬ夫婦中、涙、一つ、隠しあふ、勉共、取次の間、敷妙様、出と、娘あがらも案内、武家の行義の表門、道親子の中座敷、此頃、便もなし、心地でも悪いかと、儼杖殿も案じて云や、よふお云やつた、爰へ、美しう髪結やつたと子供の様、思ふ、母、受け參つた、お見舞でない、儼杖様へ、夫八幡太郎義家が使者でござります、奥だまりつた、表向の用事なら、家來、越さで、そなたを使者とい、奥だまり

やれ、何れもせよ使者と有れば、娘の内證いざお使者、口上の趣承なら
 んと有ければ、義家や越子、經環の宮へ行衛なき事、傳の儼杖殿誤據ら
 なし、日延の日數も今日限若も云譯なきに於て、罪を正す義家が役、聳
 舅の容赦の致さず、勅諭を以て取圍敵味方と成すさん、其時必遺恨まば
 し思されな、其爲や遣はす、使者の口上あらゝ斯の通りでござんすと
 語る中々儼杖直方、いそゝ立て一間の内、柳箱に飾つたる簾と思しく
 携へ出、扱ゝ八幡殿の天晴仁有大將かな、元來某の平家、八幡殿の源氏、聳
 舅と成り稀ある事と、そちを嫁らした其時々、聳引出ゝ赤簾一流遣はし
 八幡殿に此白簾一流、取かへて所持せしめ、兩家合體の其印、此度の我誤
 りに付て、云甲斐なき舅よしなき縁を組しよと思ひ、れんの必定、大方
 娘と縁切て、此簾を取戻しよ來るで有ふ、若去れたら其思ひ、いか計、ど
 ふぞ此白簾の、やはり此家よ止る様よと、此頃神前より飾置毎日祈るかい

有て、今日娘を表向の使者として、差越れし八幡殿の心底たどへ智鼻、敵
味方又成迎も、敷妙の去ぬと有情の謎老人が心を察し心づかひの深
切、逢ての禮も云れぬ義理、お使者歸つてすされふの仰越るゝ趣一々承
知仕る、委細の心底の對面の上り聞ん、お出を待と傳へられよ、お使者大
義と式禮も、弓矢の面裏門口、八幡太郎參上と白衣ながら入給へばこ
いつの間と敷妙も不審立そよ立母親、此比絶し一家の參會お茶よふ
菓子と賑し直方邊も目をくばり、懷中の一通取出し親い中も胸中
を計兼、今日迄の智殿も包しが、宮の行衛尋ぬべき、手かゝりといふ
の此狀、契約のこどく環の宮を密に盗出しくれよと、匣の内侍へ頼の文
体、名の誰共なけれ共、必定安倍の頼時が餘類、貞任宗任兄弟の族、奪ひ取
て儕等が、味方を集る柱よせん爲さあれば命は別條なしと、心の安堵
のまながら云譯立ぬ身の越度我心を推量有、さこそ、我推察も

其ごとく此程奥州を捕へ來る鶴殺しの科人、つら魂尋常ならず肩口よ
 ニツの壓是ぞ兼て聞及ぶ目印疑もなく安倍宗任一人の手を入しが今
 一人の兄貞任、此兩人さへ捕なば宮の行方明白たらんと、則彼宗任を此
 館へ引せ來る、禁庭の沙汰なき中、詮議肝要たるべしと力を付る時
 しも有、桂中納言様は出也とえらすれば、氣遣私の内意か勅詮か、女義
 の次へと改る、座席も心殘れ共母と娘の立て行、中納言教氏卿衣冠の袂
 も薰りくる、雪を出て雪を白き白梅一枝、小四方も取乗持參有、儼杖の
 此間公の不審蒙り嚙心を痛られん、鬱氣をはらす此梅、まだ冬籠の枝
 ながら進上す、此花と諸共喜悅の眉を開かれよと、直方が前も差出し、義
 家朝臣のわいするも彼詮議の一條ならん、殊更親しき一家の中は心底
 察し入、卿の詞共覺す、一家の一家、政道も依怙なき義家詮議の手が
 かりも成べき科人先達て捕へ置、ヤア、義家が家來共、鶴殺しを是へ引ど、

呼ひり給ふ一聲、鶴の科人出ふらうと、權威の下部の蠅虫と見下し破
布子の細付ながら、眼中威勢備へつて、實大將と大將の見參どこそ見へ
よけれ、鶴を打たる科人、外が濱の南兵衛とい飯の名、奥州の住人安倍の
頼時が次男宗任共いゝるゝ勇士、夫程のへろゝゝ繩引切の安かるべき
よ、わざと下部より引出さるゝの、義家よ鬱憤をいはんず爲な、聞て得させ
ん、何と語いかよどの給へば、是に又思ひがけない、そんなむづかしい
名の生れてから、聞た事もござりませぬ、ばくち打の南兵衛よ違なけれ
ば、元よりお前様よ勿体ない鬱憤とやら一分とやら、きなかもかけ直
すませぬ、兎角命が惜いばかり、どふぞお慈悲よ繩といて、お助あされ
て下さりませと泣ぬ計の、まらゝしよ、然らば儕産の匹夫下郎よ違
ないな、此旗を見知てゐるか、是こそ我父伊豫守奥州追討の折から、押立
給ひし白旗、其時宗任が親安倍頼時、大將めがけ放し矢先ねらひはづれ

て此簾は受^{うけ}とめ、即時^{そと}は踏折^ふ捨^{すて}られし、其矢の根^ねに爰^{こゝ}も、頼時づれ
 が拙^{つた}き運^{うん}ゑて、源氏も敵^{てき}對^{たい}叶^はぬ事、今も其餘^{よる}類^るあらば却^{かへ}て敵^{てき}の此矢
 を以^{もつ}て、斯^かの通りとてうど打^{うち}、鏃^{やじり}の庭^{には}の手水鉢^{てうすづ}じろりと見やつて是^{こゝ}に扱^さ
 あふない事をと、そらさぬ顔、教^{のり}氏^{うち}卿^{けい}進^{しん}出^{しゅ}、よし手練^{しゅれん}のとも有^{あれ}たとへ誠^{まこと}の
 宗任也共、匹夫^{ひつぶ}下^げ郎^{らう}も等^{ひと}しき男、大望^{たうぼう}の企思^{くはだて}ひもよらず、奥州^{おくしゅう}の果^{はて}は生^はれ、
 草木の名も知^しぬ鹿猿^{しかざる}同前^{どうぜん}の族^{うから}、かくいふが無念ならば、此花の名を知^し
 つるかと、白梅^{はくばい}取^とて指^さ出し、東夷^{とうい}の目^めもいよも知^しまじ、知^したらばいふて見^み
 よやど嘲^{てう}瞬^{しゅん}有^{ある}、宗任^{そうにん}ぐつとせき上^{かみ}、南兵衛^{なんべいゑ}といふ下^げ郎^{らう}でござれば、花の名
 いにかゝも存^{ぞん}せぬ、併^{しか}しそふおつゑやる教^{のり}氏^{うち}卿^{けい}も、以前^{いぜん}に流^{なが}し者^{もの}も合^あて
 配^{はい}所の島守^{しまもり}、漸^{やう}此頃^{このころ}召返^{めがへ}され、冠装束^{かんざうそく}かけたれ、迎^{むか}へ、正眞^{しんしん}の山猿^{さんざる}の冠^{かんむり}相手^{あて}
 も成^{なる}口^{くち}に持^もぬ、身^みが返^{へん}答^{たう}のコレかうど、傍^{そば}も立^たたる件^{くだん}の矢^やの根^ね口^{くち}よくいへ
 て我^{われ}と我^{われ}、肩^{かた}口^{くち}つんざく血^ち汐^{しほ}の紅^{くれなゐ}何かいあやも白^{はく}簾^{れん}も鏃^{やじり}の筆^{ふで}のさらさ

らと、文字あざやか染なす、東夷あづまのへの名も似ぬ三十一文字の言の葉
も、座も白梅の枝折て、冠傾かぶりかたむき、見へけるが、詞争あそひひやくしと、和歌を以
ての返答へんだ我國の梅の花と見たれ共、大宮人おほみやびとのいかゞいふらん面白おもしろし
く、我も歌を詠よみかけし、返歌へんかせよとの事ならん、去ながら、最前汝がい
ふごとく、此教氏このしの父の卿諸共ちやうしよ、幼少々せうせう嶋へ赴おもむき、鄙ひがも育そだちし恥はし、雲の上
も座を列つらねながら、我さへも得詠よみぬ歌を、かく即席そくせきも詠叶よみあへし器量骨柄きりやうこつがら、問
も及ばず安倍宗任ちかひも違ちがひなし、いねれぬ歌て蛙かはづの口から、我と我手も白狀
せし、淺はかさよと一言ひとことも勝色かついろ見する梅花の頓智とんち術てつも乘のりし無念の宗任、
口よくいへし鏖あさりの手裏劍しゅりけん大將めがけ打返すをてうと留とどまる源氏の白
梅はな、尤とこふこそ有あべけれ、生捕いけも捕るゝも時の運命うんめい恥はしな思おもひも猶なほ此
上も義家が、尋問とぎとべき子細有あこなたへ引ひくと引立ひださせ奥の間、さして入給
ふ教氏あたり傍かたわらを打ながめ、儼杖えんじやうが傍かたわら近く、扱あ々心づかひ察さうし、未言譯いまだいひわけの筋も

あらざるや、ハッ夫故もこそ、心を痛罷有^{いたり}さこそあらん夫も付今日貴殿に、
 心ざしたる此梅も、まだ寒中^{かんちゆう}も室^{むろ}もて温咲^{あたうめさ}せし花、天の自然^{しぜん}もあらね共、
 春を待^{まち}得て咲^さ花より、早きおがめを人の賞^{しょうくわん}又^{また}ちる時も其通^{とほり}、まほみか
 ちけて見^み苦^{くる}しうあらぬ先も、此枝のこどくさつぱりと、切^きて却^{かへ}て香^かも深^{ふか}
 し、花も限^{かぎ}らず身も又、切^き時が大事、左様も思^{おも}ひれずや、心^{こころ}深^{ふか}き此
 一品、ちりかゝつたる老の枝、切^きと給^{たま}ひる天の賜^{たま}花物いねど謎^{みそ}も白
 梅の腹^{はら}切^{きり}刀^た慥^{たしか}も落^{おち}手仕^{しゅ}る、天晴^{てんせい}明^{めい}察^{さつ}大江^{たいかう}維^い時^{とき}あんどいふ、識^し者^{しや}の嵐^{らん}も
 吹^ふちらされぬ其先も花も三^{さん}吉^{きち}野^の人^{ひと}の武^ぶ士^し、名^なを後の世^よもちらさぬ様^{よう}の
 思^し案^{あん}ぞあらまほしけれと、梅も詞^{こと}を匂^{にお}ひせてまづ、立^たて入^いりける、只
 さへ曇^{くも}雪^{ゆき}空^{そら}も心の闇^{やみ}の暮^{くれ}近^きく、一問^{ひと}も直^{ちか}す白^{しろ}梅^{ばい}も無^む常^{じやう}を急^{いそ}ぐ冬^{ふゆ}の風^{ふう}身^み
 もこたゆる、血^ち筋^{すじ}の縁^{えん}不^ふ便^{べん}や袖^{そで}もどぼと親^{おや}の大事^{だいじ}と聞^{きこ}つらさ、
 娘^{むすめ}お君^{きみ}も手^てを引^ひれ親^{おや}は子^こを杖^{つゑ}子^この親^{おや}を、走^{はし}らんとすれど、雪^{ゆき}道^{みち}も力^{ちから}なく

なくたどり來て垣の外面より、嬉しや、誰も見咎いせなんだの、門口より
侍衆が、いねぶつて居やえやつた間より、賢い子えや、儼杖様の此春から
主のお屋敷よりござらず、此宮様の所よりと聞て、どふやらかうやら爰
迄來事へ來たけれど、勘當の父上母様、殊も淺ましい此形で、誰取次で
くれる者も有まい、お目よりかゝつては難義の様子がどふぞ聞たやと、さ
ぐればさゝる小柴垣、爰にお庭先のえかり門戸をたゞくもたゞか
れぬ不孝の報ひ、此垣一重が鐵の門より高ふ心から、泣聲さへも憚て簀戸
より、ひ付泣居たり、儼杖の斯共えらず、垣の外より誰やら人聲、女共にお
らぬかと、云つゝ自身庭の面、外より夫となつかしさ、恥しさも又先立て、
おはふ袖袂えらぬ父、明て悔り戸をびつえやり、何の用と、娘共濱ゆふ
も庭より立出て、儼杖殿何ぞいの、イヤ何でもない、見苦しやつがうせおつ
て、娘共追出せ、ば、あんな物見る物でない、こつちへお來やれ、と夫

の詞の氣も付ず、何をきよとく、いのつえやる、犬いぬでもはいりましたか
 ど、何心なく戸を明あけてよくくすかせ、娘の袖そで袂はぎはつと鞆あきだてて又ばつた
 り、娘の聲こゑを聞知れど母様かとも得えもいはず、母の變かはりし形かたちを見て胸一
 ぽいふさがる思おもひ、押おしさげく定さだめない世といひながら、テモ扱さも扱さも
 扱さも思おもひがけもない、コレくばく何いやる、イヤさあやつぱり犬いぬでござんし
 た、ほんゝ憎にくい犬め、親おやは背そむいた天罰てんばつで目も潰つぶれたな、神佛かみほとけも見離はなれ定さだめ
 て世は落果おちておらふどの思おもふたれど、是は又あんなりきつい落果おちやう、
 今思おもひえりかつたかど、餘所よそもえらずも涙聲なみだこゑ、様子えらね、姫共こしども、さつて
 も慮りよう外がいな、物囉ものらひなら中間衆ちうげんしうも囉ものらひいでお庭先へむさくろしい、どつ
 どし出やとせり立たられ、ハイくどふぞは了簡れうけんなされてまちつとの間、ハエ
 つていと女中の口くち、ヤレ待まつてくれ女共おんなども、物囉ものらひ、お足がほしくバナセ歌
 を諷うたぬぞ、願の筋も何なりと諷うたふて聞せと夫の手前おつと、ちつとの間なと

隙入^{ひま}たさ、あいといへど袖^{そで}袂^{たもと}が、久しぶりの母の前^こ翠^{すゐ}の組^{ぐみ}といひ引^ひかへて、露^う命^{めい}を繫^つぐ古糸^{ふるいと}よ、皮^{かわ}も破^{やぶ}れ三味線^{さんみせん}の、罰^{ばち}も慮^{りやう}外^{がい}も願^{かん}ずお願^{かん}ひや奉^{ほう}る今^{いま}の、うき身の恥^{はづか}しさを、父上^{ちやう}や母様^{ははさま}の、お氣^きよ背^そきし報^{むか}ひよて、二世^{にせ}の夫^{つま}よも、引^ひわかれ泣^なつふしたる、目^めなし鳥^{とり}、二人^{ふにん}が中^{ちゆう}の、此^こお君^{きみ}とて、明^あて漸^{やう}十一^{じゅういち}の一^{いち}の子^こを持^もてゐる、親^{おや}の恩^{おん}、えらぬ祖父^{そふ}父^ふ様^{さま}祖母^{そぼ}様^{さま}を、えたふ此^こ子^こが、いぢらしさ、不^ふ便^{べん}とおぼし、給^{たま}ひれと跡^{あと}諷^{ふう}ひさし。せき入^い娘^{むすめ}、孫^{まご}と聞^{きこ}より濱^{はま}ゆふが飛^と立^{たち}計^{けい}戸^この透^{すき}間^ま、抱^{いだ}入^いたさすがりたさ祖父^{そふ}父^ふもかへらぬ逢^あたさを隠^{かく}してわざと尖^{とがり}聲^{こゑ}、^間ヤアかしましい小^こ歌^{うた}聞^きたふない、女^{おんな}共^{ども}も奥^{おく}へいて、お客^{きやく}人^{ひと}よ付^つて居^ゐよ皆^{みな}いけく、コレサバ、何^{なん}うぢく、早^{ちやく}く畜^{ちく}生^{しやう}めを擲^な出^だして仕^し廻^{まわ}やれさ、^スコレ腹^{はら}立^{たち}い尤^ななれど夫^そのあんまり、ハチ扱^{さく}おばい隙^{ひま}入^い程^{ほど}爲^なふならぬ、武士^{ぶし}の家^{いえ}で不^ふ義^ぎなためらう、擲^な出^だすといまだ親^{おや}の慈^じ悲^ひ、長^{ちやう}居^ゐせべふち放^{はな}そふか、親^{おや}の恥^{はづか}を思^{おも}ふて、名^なを包^{つつ}ひまだしと思^{おも}ひの外^{ほか}、今^{いま}と成^なて身^みの置^お所^{ところ}

がなさの詫言、恥つらもかまひずよくうぜた、但し親へ頼當み、わざと
 其形を見せようせたか、よつくいやつと、怒の聲、袖袂悲し、さやる方なく、
 なんくのせいもん、勿体ない去あがら、そふ思しめすも、尤、大恩を忘
 れた徒我身ながら、あいその盡た此體、お詫言したとて、お聞入れが何の
 ある、そりや、思ひ切ております、お屋敷の軒迄も來られる身で、いなか
 れ共、お命よかゝる一大事と聞て、心も心ならず、顔押しぬぐふて、参りま
 した、不孝の罰で、目につぶれる、此子を連て、爰の軒で、退立られ、かしこ
 の橋で、いふち擲る、うきめゝあふても、此身の罪よくらぶれば、まだ業
 の果し様が足ぬと、未來が猶しも、恐ろしい、此上のお願ひより、娘のお君
 お目見へど、すゝい慮外、只の非人の子と思し召たつた一言、お詞を、おか
 けあされて下されど、歎け、お君も手を合せ、少し旦那様、奥様外、願ひ
 にござりませぬ、お慈悲、一言物おつちやつて、下さりませと云馴し、袖

乞詞こひことばも濱ゆふがかないやな、子心こころもさへ身を耻はづて祖父ぢい様共ばゝ様共得い
云ぬ様もまをつたひ皆儕おのれが徒故いたづら畜生ちくしやうの様な腹はらから見事けんじ犬猫いぬねこも産うから
ず、生なまれ落ると乞食こじきさす子を、あの様もふとなしう、産付うみつけざまい何事なにことぞ、あ
んまり憎にくふておりや物がいぬぬと、むさういふのにかないさの裏うらの
濱ゆふ、幾重いくゑももお慈悲ひ、くくと泣計なみ、儼杖げんじやう猶も聲こゑあらしか、親おやが難義なんぎもあ
いふがあふまいが、女をめがいらざる世話せわ、同じ兄弟けうだいでも妹いもうとの敷妙しきたへひ、八幡
殿やしろの北きたの方かたと呼よるゝ手柄てがら姉あねめひ下郎げちやうを夫おつとも持もて根性こんじやう迄までが下主げす女をめと、
恥はづれめられてわつと泣なげ、下主げす下郎げちやうといいお情なさけない夫おつとも本もとひ筋目きんめ有侍さむらい、黒澤
左中さちゆうといい浪人なみのりの仮かりの名な、別わかれた時ときの夫おつとのみ、筋目きんめも本名ほんなも書かいてござん
す、是こゝに見みてたべと差出さしすを、取次紙とりよせのはしくれも詫わがの種たねももなれかしと、
思おもふい母ははより直方ちかたが、讀文體よみふんていの奥おくの名なも、奥州おくしゅう安倍あへい、貞任さだとうといいなむ三寶さんぽう、扱さく
い貞任さだとうと縁組えんぐみしかど、心こゝろもそいろも懷中くわいちゆうの、一通いつつう取出とし引合ひあせバ扱さくてそ

同筆、ハアはつと計當惑の、色目を見せじとすんど立穢しい此狀彌以て
あふ事ならぬ、サア奥こちへ、ハテぐすつかずと早おぢやれど、笑い詞よせが
まれて母も是非あく立て行、なふこゑばし、もふ逢ふといやませぬ、お身
の難義の其譯をどふぞ聞して下さりませ、ゆく、と、延あがり、見れど盲
の垣視早暮過る風よつれ、折から頻ふ、ふる雪よ身ハ濡驚の蘆垣や、中を
隔る白妙も天道様のおよくしみ受し此身いといねど、様子聞ねばな
んぼでも、いなぬくと泣聲も嵐ど、雪よ埋れて、聞へぬ父と、恨み泣、次第
次第ふりつもる寒氣よ肌も冷切、持病の癢の差込で、かつばと轉べ
ばお君のうろく、さする脊中も釘氷涙かた手よ我着物、一重をぬいで
母親よ、着せてまよんぼり白雪を、すくふて口よ含ますれば、漸顔を上、
お君もふよこざる、此又冷る事いひの、そなたハ寒ふないかや、いへく
わたしの、温ふござります、よふ着て居やるか、アレヤそなたハこりや裸

身み着き物ものいどふ仕しやつた、あんまりお前まへが寒さむからふと思おもふて、へッエおや親おやなればこそ子こなればこそ、わしが様な不か孝かうな者が何なにとして、そなたの様な孝かう行こうな子こを持もつた、是こゝろも因果いんぐわの中なかかとして抱だえめ、泣な涙なみだ、絶た兼へて垣かき越こえ襦うちひらとと濱はまゆふが、さつきよから皆みな聞きて居ゐる、アッアあ儘ままならぬ世よぢやあ、町まち人ひとの身の上みづかひならバ、若い者若ぢや物もの徒たづねもせいぢや、そんなよい孫まご産うだ娘むすめ、ヤレでかしたと呼よ入いて、聳むよ舅しゅうとといふべきよ抱だたふてあらぬ初はつ孫まごの顔おもてもろくよ得見うぬ、武ぶ士しよ連つ添ぞ淺せんまじさと諦あきらめていんでくれ、ヨと、いふ中うちよ、奥おく濱はまゆふと呼よ聲こゑよ、アイくそこへ参まゐります、娘むすめよ孫まごよもふさらバ、かんの者ものやと、老おいの足あし身み返かへと、く奥おくへ行い、折ひしも庭にわの飛つ石た傳たひ、雪ゆき明ありよ親うひか寄よ安やす倍ばい宗そう任にん戸こを引ひ明あれバ、このと、立たのくお君きみをぢつと捕とらへ、コリヤこのい事ことない伯お父ふぢや、い、伯お父ふ様さまとい、ち、そちが伯お父ふの宗お任にんぢや、ヤア宗そう任にん様さまとい夫お貞と任にん殿どのの弟あに、ち、ついよ逢あねと嫂あにの袖そで裁き殿どの、そんならお前まへよ問とたら知しるであ

ろ、夫婦別れる時夫は預てやつた、此子が弟の清童の息災で居るかいな、
 ま、其清童の傷寒で死だのいの、エ、ハイ歎の理り、何かは付て一家の敵の
 八幡太郎、こなたも兄貞任殿の妻ならべ、今宵何とぞ近寄て、直方が首討
 れよ、エ、あのどし様を、ま、生置ての我々が失望の妨此懷劍でと手は渡す、
 難題何と障子の内、曲者待と大將の聲は恟り折惡し、そちへくど忍ば
 せて、胸をすへてどつかと座し、繩引切て逃出んと存せし、見付られた
 の運の極め、サアいか様共行のれよと腕押廻せば義家公、繩のあらで眞
 紅の糸、結びし金札宗任が、首はさつくと打かけ給ひ、綱は漏たる鱗を助
 るの天の道、鳥類の命さへ重んずる我心、況やあつたらしき勇士、命を助
 と其札、康平五年、源義家は放つと書記せば、此上もなき關所の切手、肩
 口の壓の切さいても、武將の息のかゝつた汝、繋し犬も同前日本國中を
 放飼、何國へ成共勝手は行と、仁者の詞はつと、雪は頭の下ながら、底

の善惡閉隠す氷を踏で別れ行、夫の最期を濱ゆふが白梅の腹切刀、三方
も乗露涙外も同じ袖萩が、思ひがけあき難題も、死より外は、なくく
も、歸る戸口も父儼杖、鏝も銚えつかどおろし座も直り、三寶取て頂戴し、
押肌ぬいで覺悟の矢の根取といえらぬ袖萩が娘も見せじと突込懷劍、
はつと驚取付お君、聲立させじと抱えむれば、母の夫が片手も押へ、まだ
女めいといふからぬか、氣づよくいふ物の年寄た體いつ何時の病死も
えれぬ、聲也共よく聞てふけど、それといひぬ暇乞といふ露程も袖萩が、
扱ひふ心、和らぎしか、かう成果た身の上とふで退付のたれ死、是がお聲
の聞納めで、ござりませうと親と子が、一所も死といふ神あらぬ障子押明
立寄教氏、母のかけあり、そなたの自害えたか、儼杖殿もは切腹、エ、とく
様も、娘もと一度も驚轉びあり、垣押破り張さく胸、鞫涙もわかちなし、手
負を見届中納言様子具も承り、貞任も縁を組れし返、智の詮議も成

まじ、所詮死で叶ぬ命、袖萩とやらんも死すべ成まい、跡の詮議、某が
 よき様又計、健氣なる最期の様子、天廳に達しやすべしと、冠け高く
 まづくと、心残して立出る、衣紋又薫る風ならで、奇や聞ゆる鐘の聲、こゝ
 いふかしと立戻り、邊に心目を配る、一二の對の屋隅と、太鼓の音の喧
 し、ふしぎや、此明は殿は陣鐘を打立る、何者成ぞとふり返る、一間の
 内が高らか、八幡太郎是より奥州の夷安倍、貞任に見參せんと、立出給
 ふは、大將、續てかけ寄二人の組子、さえつたりと身をかねし、弓手妻手へ
 はつたと蹴飛し、心得ず桂中納言敦氏を、貞任とい何を以て、ホ、此義家、
 天眼通に得ざれ共、弓矢の道より賢き某、過つる大赦の砌、桂中納言也と
 名乗來其時、島育を云立、歌詠す筆取ず、何條えれ者ごさんなれど、つ
 くづく面体を窺ふ、我稚時見覺し、安倍、頼時よさも似たり、扱こそ宮の
 行衛十握の寶劔をも取隠せし、極つたり、姿をかへて禁庭へ入込し

い、猶二色のに寶を奪ひ、親が根ざしの大望を達せんと、工よな、わらが
いれぬ證據は是と、白旗を取出し給ひ、最前汝が弟宗任と、別れて程へし
兄弟の對面梅の花よよそへて我顔を見覺たるかどかけたる謎、早くも
悟つて、此歌、我國の梅の花とい見たれ共、どつらねし上の句、梅の花の
花の兄、我國とい我本國、奥州の兄ならんどの詞の割符、兄弟一致の此血
判、白旗をけがせし、源氏調伏の下心、此上よも返答有や、何とくど
差付られ、貞任無念の牙を嚙、逆立髪、冠を貫き、怒の大息はつとつき、
口惜やなわ、我一旦浪人となりて、都の様子を窺ひしが、官位なくて、大内
へ入込れずと、流人赫免の折を幸、誠の教氏の先達て病死せしを、我也と
偽つてつゝい、逢ぬ舅、儼然けふ始ての對面、情らしく見せかけて、腹切
した、詮議の種、一通をとらん爲、所詮謀空しく成、親の敵、八幡太郎
相手向ひの勝負、えて運を一時、決せんと、太刀、手をかけ、詰寄、アセ

いたりな貞任、汝獅子王の勢有共、八方に敵を受一人の力に及んや、又其
 万が一命の環の宮と寶劍の有家、責る共よも白狀せじ術を以て搜出す
 夫迄、いつ迄も助置命ながらへ時節を待て、戦場の勝負のなせせぬぞ、
 今犬死して親頼時が、大望の無にするか、弓矢の情の相互、夫婦の探も節
 義の、一つ、真心厚き袖萩が、最期の際に一言、妻子は詞もかけよかし、暇
 乞をと仁愛もあふなつかしの貞任殿、最前からよふ似た聲との聞あが
 ら、あんまり思ひがけもない、六年ふりで廻り合、顔見る事も叶ひぬか、死
 る今に、あちよつとなと、此目が明たい、お君、どう様のふと稚子を見る
 は、適の貞任も、恩愛の涙はら、く、く、大將、憐思し召て、親の縁切たる
 お君、義家が子に養い、んと仰は、餘杖有難涙、いかなれば某の敵と味方を
 罅も持、因果も思ひ廻らせ、代ふ不和なる源平を、先祖も背て縁組た、我
 誤りを白簀の此、白梅を血に染て、元の平家の寒紅梅、娘、父上いざ一所、

智殿さらば、我夫さらば、僚杖殿、姉様のふと別れの涙、母の袂も敷妙も、一度はわつとぬる袖に大將も直垂の、袖射削つて餘りの矢先、竹は忽すつくと宗任、最前見遁し歸りし、兄弟本意を遂ん爲、優曇花まさりの親の敵、勝負くと、話かくるを、貞任えはしと、押しめ、晋の豫讓の衣をさく、八幡とい入つの幡此、白幡をまつ此ごとく手は取れば、八幡が首提ん、案の内、敷妙の身は、太切な、夫婦の縁を繼目の旗、大事は召れ、濱ゆふど渡す、舅のはた天蓋、舅が最期は魂をひるがへしたる梅花の赤旗、我家の旗諸共、奥州は押立、父頼時が吊軍、一先此場の宗任來れ、實尤兄者人、雪持笹の源氏の旗竿、一矢射たるに當坐の腹いせ、首を洗ふて義家お待ちやれ、互は戰場、夫は重て先づ眼前は朝敵の安倍、貞任、生捕て面縛させんと、いふに表、其装束を其儘は桂中納言、教氏卿は苦勞ぞふと式禮、おさらば、さらばと敵味方着する冠装束も古郷

へ歸る、袖袂たもとかりの翅つばさの雲の上、母も別れて、稚子わらわこが父よと呼よべふり歸り、
 見やる目元めもとも一時雨しぐれ、ぱつと枯葉かれはのちり／＼嵐心かぜこころよ、いれど兄弟けふたが又、取
 直ただす勇聲いさみ、よるべ、涙なみだも立兼たがひて、幾重いくえの思ひ、濱はまゆふが身みも、ふる雪の白妙しろたへも
 なびく、源氏げんじのほ大將、安倍、貞任、宗任が武勇ぶゆうの、今も隠かくれなし

○第四 道行千里の岩田帶

傾城けいせいの、瘡しやうの、誠まことの置所おき、世界の客きやくへ、そら言ことも、ひとりよつくす眞實しんじつの、戀の
 中なる、戀絹こひきぬが、寐姿ねすがた恥ぬ中となる、其こしかたの、通かよひ路ぢの、花車はなぐるまの、かけ橋はし
 渡り初はじ、生駒なまがけの手綱てづなせきとむる、轡くつわの、關せきを、打越うちこへて、今いまの、女夫めうとの、藥賣やくうりわらぢ
 もかくす、八文字やんもんじおろせ、頼たのまぬ、日傘ひがささして、行衛ゆくゑの、陸奥むつの、國陸月こくづきも出し、
 都みやこの、空谷くうこの、初聲はつこゑ、聞きこ初はつて、彌生やよひの、花はなの、生うまれ月つきうしや、櫻うめの、顔隱かゝりす、霞かすみを、はら
 ふ、春風はるかぜを、仇あだど、誰たれが、いひ初はつて、草くさのはつか、解紐とくひもの、結むすばれ、合あし、朝寐あさね髪かみ
 まんきらしいも、命いのちかや、人目堤つゝみも、荷にを、おろし、家傳かでん、葛城かつらぎ神靈丹しんれいたん、は、用もちの、こ

さんせぬか、お求もとめなされ買かひあさんせと賣聲うりこゑも、道みちそれえやの身みあれ共迷まよ
ふの木々や若草もつまこふ、虫の聲なくてけはひ、はがせし、くれの蝶てふ、ど
まり定めぬ浮世うきよのなんの、真間まゝの入江を見渡せば、月つきの渚なみも乗のりかくれ浪
より雲も、入舟や風も逆櫓さかろのさつ／＼さ、さつととわたる、鳥の聲こゑ、かり金
よ其玉章たまづさのたがみぞ、戀の宛名あてなの只一人、越このえら山ふる里よりも、月も
つれたちもてくるみを、花も別れて歸るの返事へんじ、チ、嬉うれし、チ、嬉うれし、チ、それ誠まこと
我もまた、かぶろ立たちから物馴ものなて人の、やりくりみづかひ、身も白糸しらいとをかり
出す、瀧たきの流ながれを立たる身も清きよき、心をたどふ紙野邊かみ野べもそよく、こちの人さ
まよ、チ、よい女房にようばうと戯たむれの、わりなき中も姫君みぎみも、未來みらいの契ちぎり盃さかづきの、井筒づいづも
かけし生駒いこま様我の裏見うらみの、たきさし、いつかすかりと捨すられん、チ、去さと
てい浮世うきよぞや、いつそ此身このみの此儘このままも、黒髪くろかみ山の、墨染すみぞめと思ひ、切きりも、切きりせ
で此世計このよかけりの女夫めうととい、ほんも結むすぶの神さんかみさんも粹すいの様ようもない事とはか

な女の、かこち言、妹脊のねぐら、夕風よばつと立たる雀の宮、竹も緑ある源を守る、誓いた頼め、標茅が原のさしもぐさ我一命のあらんかざりいれあり家尋出して大君をふたゝび都へきつれ川吉左右清き道の邊の清水、ながるゝ、柳かげえはし、とてこそ、やすらひぬ、

東山道の國の果陸奥一國の出入を改め、非常をえめす白川の、關の守の瓜割四郎、一人權威をつく棒さす股、ことぢも通ふ鴈金迄、救さぬ道の關の戸の嚴重こそ見へまけり、生駒夫婦の、關所共、いざ白川の、番所の前の通りかゝれ下部共、調りよくわい、慮外者めら、爰をどこだと思ふ、瓜割四郎様の堅かための關所笠をぬいでかつつくばいどれからどれへ參る者と斷て通りおらふと、留られて戀絹が、瓜割四郎と聞驚き、猶顔隠し行過る、調りよくわい、胡亂者遁すなと、立寄下部を生駒之助、マ、マ、胡亂な者でござりませぬ、は覽の通り我々の藥賣、伊達な所を目印、賣弘るといふながら、あの日がさ

で顔隠さねば、口上の一口も得ずさぬが女だけ、顔隠すが癖と成て、關所
共憚ぬ不調法、何事も女だけとは用捨なされお通しなされて下さりま
せど、いひくろむれバ瓜割四郎、聞届し女商人、用はない早く通れど、赦
す詞も二人の嬉しく笠かたむけ立出る、戀絹が手をえつかと取、イヤそも
じ計のいつ迄も爰も留る、生駒之助も用はない、戀絹置いて早く通れとい
ふも夫婦が恟りし、私等を見違もせず、お前によふ覺てか、覺てかどの
曲がない、深山鳥も白鷺も我つま鳥の知物を、譬姿のかわつても、見ちが
へてよい物か、爰で逢たの盡せぬえよし、是から我らが宿の奥様、何と憎
の有まいがど、よれつもつれつよねんなく、恥を耻共思のぬ赤頬抱付た
の山蜂が、花の露吸ごとく也、尾籠至極と四郎を取て突放し、昔の昔今
の志賀崎生駒が女房望あらば汝が首と、替物せんと呼のれせしら笑
ひ、素浪人の分際でえやらくさい女房呼のり、戀絹も己が首添てこつ

ちへ受取ふと、いふより早く切てかゝる。心得たりと身をかねし腕首取
て引くり返し、骨も折よと蹈付く、蹈付られて半死半生、主と敵たふ
慮外やつ、と遁すなど數多の下部、一度又抜て切てかゝる、主と敵たふ
蠅虫共、うぬらも主の相伴と、片手なぐり又切まくられ、詞も似ずちり
ちり又逃るを追て生駒之助、コレふあふない、長追無用と、呼りく、戀
絹も跡又續て走行、一人残つて瓜割四郎、心いやたけとはやれ共、足も體
もぐふやくと、どころてん見るごとく、立て、立も得やらぬ有様の目も
當られず、哀なり、かゝる折から賣來る、藥の町中評判の、あんぽん丹、は用
ござりませぬか、何みさく共きかぬ共、えらぬ所があんぽん丹、は用とこ
ざれば一貝が三十二錢、半貝が十六錢、心見とやが僅八錢、あんぽん丹は
用とござりませぬかと賣聲聞て、藥や、先く待と呼止め、身共が事の瓜
割四郎といふて、此關所の役人成が、いかある過去の報みや、ずい合戦も

赴^{おもむ}んとすれバ、忽^{たちまち}五^ご躰^{たい}ぐまやと痿^{ちへ}、此^こ通^{とお}ぐまやと痿^{しうろ}心^{しん}計^{けい}をいらつといへ共^{とも}挑^{てう}燈^{てん}で餅^{もち}つくごとくかいもくとんど役^{やく}も立^たぬ、なんと體^{からだ}がまやつきりと成^{なり}藥^{やく}があらバ求^{もとめ}たしと、世^よも哀^{あはれ}も問^{いひ}かくれバ、コレ^こへお前^{まへ}のきつい仕^し合^あ者^{もの}抑^{おさへ}此^こあんぽん丹^{たん}とすすひ、一名^{めい}を長^{ちやう}命^{めい}丸^わとすて、其^{その}様^{よう}も氣^き計^{けい}せいて、何^{なに}の役^{やく}も立^たぬ人^{ひと}も、此^こ藥^{やく}を用^{もち}ゆれバ、忽^{たちまち}五^ご躰^{たい}鉄^{てつ}石^{せき}のごとく、譬^{たとへ}バ強^{がう}敵^{てき}入りかいつて合^あ戰^{せん}す共^{とも}、ちつ共^{とも}よみを喰^くぬが名^な方^{ほう}、先^{さき}心^{しん}見^みも一^{いっ}頁^{げつ}上^{じやう}つてほらふじませと、小^{ちひ}さい錫^{すい}の器^{うつは}物^{ぶつ}、取^と出^だして手^ても渡^わせば、嬉^{うれ}しげも指^{ゆび}先^{せん}も、付^つけて一口^{いぐち}吞^{のむ}よと見^みへしがむつくりまやつきりすつくと立^たて、あらふしぎや、此^こ藥^{やく}我^{われ}のんどを過^するやいなや、忽^{たちまち}五^ご躰^{たい}ひりくとして、其^{その}あつき事^{こと}火^{くわ}焰^{えん}のごとく、筋^{すじ}骨^{ほね}共^{とも}も節^{ふし}くれ立^たたる心^{こころ}地^ちよさ、ハ、誠^{まこと}や、氣^きの陰^{いん}もして其^{その}色^{いろ}白^{しろ}し、陰^{いん}中^{ちゆう}の陰^{いん}今^{いま}變^{へん}易^{えき}して、紫^{むらさき}の色^{いろ}を顯^{あらわ}す事^{こと}偏^{ひとへ}も此^こ藥^{やく}の德^{とく}も有^あハ、權^{けん}妙^{めう}成^{なり}ふしぎ成^{なり}と、めつたも虛^こ空^{くう}を脱^{だつ}付^ぷけ諸^{しよ}手^てを組^{くみ}んで立^たたる有^あ様^{よう}、

なんと奇妙でござりませよが、まだ責道具が入るなら、具足なりと兜なりと、鉢巻もござります、其かひりも、必茶をわがりますな、湯茶をわがると、元の通よりやつきますぞ、過分くと代物渡せの薬や、箱をかたげて別れ行、始終の様子をとくよりも、戻りかゝつて立聞二人、戀絹が耳も口、何やら町生駒之助、元の所へ立忍べ、戀絹態おろく、聲生駒之助様のふと、呼りく、うろく、と尋さまよひ、四郎よばつたり、こゝ誰ぞやと立退ば、えがみ付、こゝい者ぞやあい、只居より四郎じやく、そもじを待て最前から、えやきばつて居るのいのだ、餘念のいを見て取それぞや、お前なら悔りいせぬいな、誰じやと思ふてつかへが上つて、あいたくと胸撫さすれば、何とぞたくと、瘡でも痛か、薬やらふと紙入より黒丸子、すお慮外ながら、水でもあらば、一口吞して下さりませ、水の毒だ、茶を吞そふと番所、茶瓶と茶碗持て出、コレ一口

と指出せば、調、やぬるいやら、あついやら、香かで見てくれたがよいと、氣を
持もたされて實げもく、我等が香かさし香氣けぢやの、調、忝かたじけないとぐつと一息いき、香と
其儘まま、くど、いふより早く體からだの忽たちまちぐまやくく、たのい、やくたい並木
のかげを、立出る生駒之助調、扱てもきついうつそりゆ、儼おのれがほんのあんぼ
ん丹つひ、付ふ藥のあいやつと、どつと一度は打笑ふ、折から又も追くる人音、
どてもの事ことは跡腹あとばらの、痛いたまぬ様ようにしていこと、上張うはりぬいでてつ取早く、瓜
割四郎は打着せく、暫し木影かげは立忍べ、引返す數多あまたの家來しやう、調、最前の
藥くすりやめ、遁のがすなくくれと衣裝いしやうを目宛めあて、大勢寄て手取足取てとけ、騷立さわだちたる透間すきを
考へ、時分じぶんのよしと戀絹夫婦、跡をも見ずして、遁のがれ行、寒林かんりんは骨ほねを打靈鬼うちれいき
深野しんのは花くわを供する天人、風漂ふうひょう茫ぼうたる安達あたが原、隣どろ家なき一つ家の軒のきの
柱はしらのすね木の松己まつのが氣儘きままはまどゐるゝ、薦つたの逆立さかだち鱗うろこのとく、いづれの工
か青龍せいりやうの形かたちを削けつりなせしかとさる物、すこき垣生あはちやは住駒居駒手駒すみこゑるこゑたるか

せの、車やわくらはゑ、來人希の黄昏時は無心ながら煙草の火、一つ借て下さりませと笠を片手、旅の者、老女の簀をくり止て、暮迄あるかゑやます、何ぞ過急のは用か、ア、ちつと急のかいせ銀、福島迄持て行者がやが墓るので氣がせきます、何ぞやかいかせ銀を持て行のぞや、ア、銀をや、此物騒な安達が原退剱と出合ぬ様、用心えていかえやませと、いれてこなたの悔り顔、ア、退剱が出ますかの、ア、出共、きのふもてうど今時分、ア、向ふの森の中で殺された人が有、アといふより身がたがた、ア、かみ様、我等生れ付て其退剱がきつい禁物、どふぞ今夜の爰の内、泊らして下さりませ、いやのふ、其様な銀持た人を、こちの内、留て、ア、氣が張て夜がねられぬ、ア、そこがお情、お慈悲のかみ様、夫程このか留てゑんせふ、ア、夫の近頃忝いと草鞋といて上り口、ア、嬉しや、是で心が落付た、ア、めつた、落付ゑやんな、爰、泊つてもこなたの懷、銀が有

と、又退剝が來きあろもえれぬ、其銀ばゝが預りまゑよ、夫こハ扱さ悪い事
ないぬと手を差入て引出す財布さいふ、それ渡していとえつかと握にぎり、おば
ばこそやわと、よが剝はえやの、何のいの預つてやるのえやと、財布持手
又兩手をかけ、引ばこゑたも門口かどの柱はしらを片手又ひんだかへ引ひつひかる
る力ちから又腕かみすつぽりと、抜ぬて尻居しりゐゑへたゐる老女らうにょ、おれを殺すかと、よろ
めく旅人りょじんを打倒たふし、のつかゝつて喉のどへ、ほうと喰付喰殺くひつきす老女の業わざぞ、恐
ろしき、ア、嬉しやと、疊たたみを上、死骸しかいを蹴落けし口のはたのこふ血汐ちしほの腕取上うで、
ま、えふといまだ財布放はなしからぬ、ア、儘ままよ、腕々うでち取とて置おふと、芋桶かきの底そこへ
取納おさめ、又くり返かへす糸いとよりも頭かしらの、おがせかき乱みだす、草くさ又育そだて草ならぬ花
の鄙ひなでも、都でも、可愛らしさと憎にくさげ、跡あとから付てあんぽん丹、聲こゑか
りのえ、大前髪おほまへかみ、お娘おむすめ、こりやと迄連つれていかんすのえや、日ひの暮くる
幸さいひ人のこゑ安達やすたが原、此草村このくさむらでついちよこ、祭まつりの太鼓打仕廻たいこうちまわはん

といきつた撥の納ばがない、サア、爰でと鼻息も、せしなまだ暮切ぬ
薄明り、誰ぞが見たら恥しい、袖の振合も他生の縁と、今來る道でお近付
よ成、此片遠所迄送て貰ふたお前、私が使ふ行家も、ふ爰、ちつどの間門
口よ待て居て下さんせ、つい口上いふて出て戻る、其内よの暗もなり、ハテ
どふなりとお前次第と、跡い得いはず顔赤らめ、袖打覆ふおぼへ氣も現
ぬかして、そんなら爰よ待て居る、必早ふ戻ろぞやと、門よすつくり松の
木立、娘の内へ入口の戸を押明て、今歸りましてござんすと、いふよ主
が不興顔、わしもえらさず出あるいて、日の暮る迄どこよはいつてご
ざりました、大事の身を持ちながら大膽な一人あるき、嗜まやませとつて
ふども、如在不い氣を吞込で、わしもおまへいふてからと思ふたれ
ど、又供の人雇のと世話よ成が氣の毒さよ、沙汰なしよいて來たの、今
のナは病人のは願やら何やらかやらの神參り、重てからの斷つて參りま

せふ、もふ堪忍して下さんせと、斷聞て心も折、神參りと有、何の否と
すませう、此様とがく、いふもか前のお爲、人に見られていならぬ身
の上、かういふ中も誰見まい物でもない、早ふ奥へござりまして、何か
心を付て合點か、用が有あらつゝ此ば、を呼えやりませ、必端近ふ出
まいぞ、早ふあいの、返事ながら表の様子、主の耳へ奥の間
の障子押明入ふける、門は何も白鷺の首程長ふ待草臥、うろく内
を指視けば、誰ぞや、どこの人ぞや、小暗りうさんらしい、大事な者
ちつと用が有て、めんよふなもふ出そふな物ぞやが、よくそこな人、出そ
ふあとい何が出そふな、出そふなといふたの、もふ月が出そふあといふ
事ぞや、月の事か、そしてうろくどこなた何ぞ落したか、尋る
ふなら火をともしてかしてやりませよ、幸の高燈籠大義ながらおろ
して下されといひつゝ取出す火燈箱、こちく打ばこてくおろす、戀

の闇路を照すとい氣當りよしと心で悦び、又引上る、細引の、長い鼻毛で釣かけた娘はまだかと、指覗、しばさ、爰の内へたつた今娘が一人來まゑよがの、來たが夫が何とゑた、其娘も、もふいなんか待て居るといふて下され、いなんかといとこへいなんか、あまや餘所の者ゑやない、こちの内の娘ゑやないの、あ、今來た娘、爰の内の娘かへ、あむ三ゑもふた、興疎なげな顔わいのけふ氏神へ參つた戻りも、どれやら送つて貰ふたといふたが、扱ひこなたで有たの、是、いまあゝ若い人ゑやが、奇特もよふ送つてやつて下さつた、遠道があるいた草臥やら、もふ奥もねて居ます、こなたもいんで休んで下され、太儀でござつたと、戸口をびつゑやり立出され、物も得いらずむゑやくゑやとよきびだらけ、赤ら顔、ふくらかしてもせふ事なく、むむといめゑあ、いおつた、結構な釣者がかゝつたと思ひの外、あちらこちらへ釣れてのけた、い

いましい、けたいの悪い娘め、どふするぞ覺て居いと、つぶやき／＼立出
し、何思ひけん立歸り、裏の藪垣押分、かき分忍び、入共白糸の簀くくり
まく総車、廻る月日の關の戸を、漸遁れ、生駒夫婦、行先とても定まらぬ、あ
てなし旅の行付次第、安達が原の高燈籠、心便、たどりつき、戀絹、若も
關所の追手がこふかと、氣のせく儘、日をくらし、どんと宿を借損ふた
跡の村で聞た爰が彼安達が原、何と廣い野原ぢやないかいの、ほんゝま
あ方角さへ知ぬ所、道は迷ふたらどふせうと、案じてわたえや癪がいた
い何の案じる事が有、氣遣ひ仕やんな高燈籠が有からぬ家がなふて、
叶ぬ筈と邊見廻し有ぞ／＼、あれ／＼あそこゝ火の光り、こつちへお
ぢやど、戸口は立寄案内、まらぬ旅の者、足弱を連暮、及び難義致す、一夜
を明させ下さらば上もあきお情と、案内すれば老女の立出、夫れいまあ
ま、あおいとしや、殊ゝ女中も有そふな、お泊りなされと、うたけれど、氣

の毒の間所もア、ゆく、譬牛部屋灰部屋でも、一夜お泊下さらば生前の
厚恩、ハチ自由をお厭ひなされず、成程お留ませふ、是にく、忝し
と夫婦が悦び、杖草鞋脚伴の紐もどく、と二人を誘ひ内へ入見まし
た所かお侍どれからどれへのお出ぞやと、尋ふ戀絹會釋して、私共の
郡の者はるくと此國へ参つた、幼い時別れたる、これく女房
我々の當國松島一見の爲、夫の格別、時ならぬ高燈籠のお國の風か但
お志の常夜燈かと脇道へころばす氣轉主の何の氣も付ず、尤のお尋
此所の安達が原とやて、山なり原也道の知ぬ街道、てうどお前方の様、
道に迷ふて難義するが多い故、あの様、燈籠を燈し、往來の衆の助め
るも、先立れし連合の未來の闇を照す明り、是にく限りもなき大功徳
と、咄の中、戀絹が、旅の勞か、苦しむ体、女房何と云たと寄添夫を力草
どふした事やらきつうおなか痛ますと聞て、何ぞや腹がいたい、

サア、事^{コト}やとうろ付^{おつと}夫^{コレ}、何^{ナニ}を其^{ソノ}様^{よう}、腹^{はら}の痛^{いた}む、旅^{たび}勞^つ、水^{みづ}のかゝり、
有^あ事^{コト}と、落^{おち}付^つ主^{しゅ}氣^きのせく生^{なま}駒^{こま}、くそんな事^{コト}やとざりませぬ、何^{ナニ}を隠^{かく}そ
ふ、女^め房^{ぼう}、此^{この}月^{つき}が臨^{りん}月^{げつ}でござります、大^{おほ}方^{かた}其^{その}氣^けが付^つた物^{モノ}、サア何^{ナニ}や、此^{この}月^{つき}が
産^う月^{つき}や、ア、此^{この}女^め中^{なかつ}が、ハチ扱^と夫^そ、いと心^{こころ}の工^く面^{めん}、夫^そ、あいて立^たたり居^ゐたり、
サ、どこぞ爰^{こゝ}ら、餅^{もち}やが有^あなら、取^と上^あば、を味^{あじ}噌^{そう}汁^{じゆ}で、焚^たて喰^くして下^{くだ}さり
ませど、何^{ナニ}をいふやらうろくきよろく、サア、お前^{まへ}方^{かた}も、こぼれかゝつた
者^{もの}を連^つて旅^{たび}するとい、大^{だい}膽^{たん}な、ドレわしがおなかを見てやろと、懷^ふへ手^てを差^さ
入^い、サ、まだ、今^{いま}やちよつどの事^{コト}やない、此^{この}痛^{いた}、いつい直^{ただ}るとそろ、胸^{むね}を
撫^{なで}さすれば、戀^{こひ}絹^{きぬ}、心^{こころ}地^ちよく、ほん、とんと痛^{いた}が直^{ただ}りました、お前^{まへ}様^{よう}、お
功^{こう}者^{しや}など、聞^きて夫^そも落^{おち}付^つ吐^と息^{いき}、ア、あんまり落^{おち}付^つまい、何^{ナニ}時^{とき}の知^しぬおなか、
たが道^{みち}中^{なかつ}の冷^ひが入^いて心^{こころ}安^{やす}ふ、出^で來^きますまい、ア、何^{ナニ}ぞよい藥^{くすり}を進^{しん}せたい
物^{モノ}や、サ、幸^{さい}なとが有^あ、此^{この}野^のはづれの庄^{しやう}屋^{おく}殿^{だん}、結^{けつ}構^{こう}、安^{あん}神^{じん}散^{さん}が有^あ、あゝ

やはやめにも成藥、わしがいて買て來て進せなければ、年寄て夜道の叶ぬ、大義ながらこな様いてといふても道の案内えらずで有、いつそわしと二人いて買て來ませう、コレ女中、ちつとの間、之や、留主、まてござれや、あの藥一ぷく吞と心安ふまめなる、夫のまわい、いかぬお世話、生駒様も此苦勞ながら、あなたと一所はおつと合點、我等の先へ生駒之助と口合たら、立上れば、老女も小づまかい取て、必氣遣な事のない程も、ちつとの間待てござれ、わしが留主の内、奥の襖を明まいど、サア、ござれと打連て、戸口へ出しが立とまり、コレ藥代がいるが路銀、持てか、成程肌、ござります、おつとよし、コレ女中、かんまへて聞の内を覗てばし見や、えやんなど、念、念、念、おす老の坂道の、助、生駒之助、伴ひてこそ出て行、跡、一人、戀絹が、心細さは行燈の、火、かき立てもかき曇空も物うき旅の宿、ほん、ま、あ、人の行衛と水の流程、定らぬ物、ない、都の者が陸

奥^{おく}三界^{さんがい}、まかもやゝ迄^{さか}産^う様^{よう}又^{また}成^なといふに、ま思^{おも}ひ廻^{まわ}せば女^{おんな}程^{ほど}あじきない者^{もの}ないど、打^うまはれしが、ま、ぐちぐち、譬^{たと}野^のの末^{すえ}、山^{やま}の奥^{おく}でも、かいい男^{おとこ}ど、一所^{いしょ}又^{また}居^ゐるが身^みの樂^{たの}しみ、どふぞよい男^{おとこ}の子^こを産^うで、主^{ぬし}の悦^{よろこ}べまやんす顔^{かほ}が早^{はや}ふ見^みたい、またが若^も女^めの子^こあど産^うだら機^き嫌^{げん}が悪^{わる}ふに有^あまいか、ま儘^{まま}よ、女^{おんな}子^こまや逆^{さか}まんざら捨^すふ共^{とも}いねれまい、二^ふつ取^とならよい男^{おとこ}の子^こを産^うで、夫^そ婦^ふが中^{なかつ}又^{また}添^そ乳^{ちち}の枕^{まくら}ねんくころくんくがいふて見^みたいと女^{おんな}氣^きに、それまやの果^はでもまどけなき次第^{しだい}又^{また}更^{あらた}る、夜^よ嵐^{あらし}の身^み又^{また}しみ渡^わつて物^{もの}凄^{すご}き、安^{やす}達^だが原^{はら}の軒^{のき}もる月^{つき}、遅^{おそ}い事^{こと}で有^あぞ、こんあ廣^{ひろ}い所^{ところ}又^{また}わし一人^{ひとり}置^おて、つい戻^{もど}つてくれたがよい、ほん又^{また}今^{いま}のかみ様^{さま}が、閨^{ひめ}を覗^{のぞ}て見^みなといふて有^あたがちよつと見^みよふか、何^{なん}ぞここの物^{もの}でも有^あたら悪^{わる}い、又^{また}見^みたい物^{もの}でも有^あと、氣^き味^み悪^{わる}ながらろろく障^{しやう}子^こ開^{ひら}いて、何^{なん}やら、白^{しろ}い物^{もの}が有^あと手^て又^{また}取^とて、悲^{かな}しや體^{てい}々^々やと、逃^{にげ}退^{のくひやう}拍^{はく}子^し又^{また}苧^お桶^{かづ}又^{また}ばつたり、爰^{こゝ}

よも又人の腕かゝると、氣も魂たましひも消入思ひがた／＼震ふるひ漸おそくと、表の方へ逃にげ出れ
バ後うしろはすつくり白髪はくはつのばい、すく、ミヤと、呼よひる聲こゑも又恟びくり、こはい
者ものぢやない、主しゅのばいでござるはいのと、聞きて少すこい人心こゝろ地ぢ、ほんよおまへ
いおかみ様さん、いつの間にお歸かへりぞ、定さだめて主しゅも一所いしよである、ちやつと呼よんで
下したさんせと、胸むね撫なでおろす計はかり也、連つれ合あひいまだ跡あとも、こなたまちつと用もちが有
て、ばい一人戻もどりました、何なんぢや連つれ合あひはまだ跡あともぢや、又またきり／＼戻もどつ
てくれたがよい手てが出るやら、髑しやれ髒かうづが出るやら、どふやら氣味きゐの悪い内うち、
どれ迎むかへと、云いひ捨すて出るを引ひといめ、其夫そのおつとの戻もどられぬ先さきも、こなたまばい、が
無む心しんが有あ、其無む心しんといはえやんすい路銀ろぎんをかせといふのである、わし
が肌はだもないよよつて、ちよつと夫そを呼よんで來きて、銀計かねぢやない、路銀ろぎんよ
りまだ外ほかも、こなたの肌はだも付ついた物ものが有あ、夫そをばいが貰もらひたい、銀かねより外
もわしが肌はだも付ついた物ものとい、外の物ものぢやあい、こなたの腹はらな子がほしい、

「あのかみ様と云た事が、そんな事なら人をびく／＼さ／＼んがよい、お前様のお世話でかたわでもない子を産だら、其時にとふ成と産だ子の役も立ぬ、まだ腹も有中を、子籠といふて大銀も成大妙薬、それで其子が貰ひたい、エ、あの胎内も有子を、どふしておまへ、心安ふとられる、つい其腹を、裁割て、お、あの子と云た事が、何の夫を震ふ事で、ばい、がいたふないやうも、つゝ一思ひも殺してやる、よい子ぞや、爰へちやど／＼ござれ、ア、ばて扱ふといひござれいのすりやわたしを殺して、さ、くどふ、其薬がほしさも、どうかから尋た孕女、世間も澤山も有物なれど、尋る時の意路悪ふない物いの、コレぐさ／＼ゑて隙入れて下さんな、きり／＼殺してまだ寺参りせよやならぬ、年寄の後生一ぺん南無阿彌陀佛、く／＼となふる口の耳迄さけ、安達か原の黒塚も、こもれる鬼といひつべし、懸絹有もあらぬ思ひ、私を殺すとおつゑやるも銀からおこつた事なれば、路

銀も残らず上まゑせん、まだ其上に此衣類はいて成共助てたべつらい
 命をながらへて、陸奥迄さまよふも、何とぞ安ふ産たい計、よくく深い
 縁なればこそわたしがあかさを仮初も、十月も及ぶやどり子にせめて
 此世のあかりを見せ、一日成共親よ子と互に呼つ呼るゝ迄、命が惜い、死
 とむない、慈悲や情や、コレと取付歎けど、聞ぬ顔、何やらいのえやる
 そふなが、年寄といふ者の、此耳が遠い、コレそろくやりかけ
 ふと、小づま引上玉だすき、透を窺ひ戀絹が逝出るを引戻し、懷劍逆手
 取廻せば何とせんかた涙聲、聲が高い、サアくそれでも、息の根とめよ
 と突かくる刃先をよけてもよけさせず、付けつまいしつ追ひ廻り、なん
 なく肩先切こまれ、立足さへもたぢく、又突かくる白刃の切先兩
 手は握つて、こりや是程いふても聞入れず、どふでもわしを殺えやるの
 ま、こなたに、鬼かいの蛇かいの、死る我身の、因果共縁共、あきらめても

死れふが、可愛や此子が、闇より闇に迷ふて母を尋ふと、思へば悲しい、死
どむない、何の因果でわしが身も、やどつて來たぞと身をふるゐしもだ
へ歎くぞ道理なる、七めんどうなよい言と、懷劍しでけり紅の血汐
よ染る手を合せ、どんぞお慈悲、連合の歸られる迄、せめて名残またつ
た一目逢て死たい顔見たいと、延あがつて表の方、生駒様のいふ、わしや
今切れて死にいの、我つちのふと泣さけぶ、聲さへいとい、遠近の空吹風
の音計、世話やくないやい、其連合のな、方角知ぬ山中へ、突放して戻つ
たれば、今時分の猪や狼も、喰殺されてゐるであらう、其跡へ廻つて、路銀の
こつちへしてやるのぞや、何とよふゑた物か、夫も逢たか、早ふ冥途へや
つてやると、たぶさ擱んで肝のたね指通されて七顛八倒、苦しむ體の
くるく、輪乗のごとく打またがり乳の下より十文字も、腹裁破る
有様の目も當られずむごらしき、斯共しらず生駒之助、山道も踏迷ひ漸

歸る表口戸をほとくとおどづるれば、内より恟り老女がはいもう見付られて、一大事と、赤子の血汐をてつ取早く用意の器に絞り込見廻す傍より以前の髑髏、あやしや、此迄やれかうべとぞみ込血汐と不審に立ど氣にわくせき、女の首よりかつたる守り袋の紐引切、一つは集め奥の方指足えてぞ忍び入、表に猶も打たしき女房共戻つたぞや、戀絹く、と呼ぶたしけど音せぬ、ふしぎなどさし覗見れば血に染女房の死骸、南無三寶と氣に半乱、門の戸踏明かけ入て、女房何者が手よかけしぞ、戀絹やいといふかいさらみなきからを、抱上て立たり居たり、遅かりし残念く、嗚我を待つらん、可愛の者やいぢらしやと前後、涙よくれるが、泣目をはらひ疵口より心付、腹をあばき、胎内の子迄手よかけし、盜賊のわざ共見へず、何よもせよ此家のバ、我を出しぬき歸りし曲者、引くしつて詮議せんと裾はせおつて奥の方、主が寢屋とおぼしき一

間あいの戸襖踏ひらけば、内へ朱玉をのべたるは殿、翠簾卷上てたをや
かゝ打ふし給ふ稚宮傍より従ふ老の身も賤の姿を引替へて、十二單より緋の
袴白髪額をさげ髪や敬ひかしづく有様より荒し生駒もすゝみ兼暫らく、
ためらひ居たりしがちつ共憶せず大音上、體は綾羅のまどへ共禽獸
も等しき狸は、妻の敵子の敵覺へが有ふ覺悟せよと、誥寄ればつた
と晩、忝くも當今の弟君環の宮の玉座間近く尾籠の振舞かくいふ我の
奥州六郡の司安部太夫頼時が妻情なくも我夫を八幡太郎より亡され、無
念の月日を送る中、成長したる貞任宗任、環の宮を奪取し、奥州の内裏
と仰ぎ、諸人をなづける謀叛の根ざし、いかなれば此君、我國へ下向の時
より物いひ給ふ事叶はず、一天の君としてかゝる難病世の嘲り、とやせ
んかくやと醫術さまざま、昔漢の世より有人此病を煩ふ、名付て止聲病と
いふ、其頃者婆が秘密の家法孕る女の腹を裁、胎内の子の血汐を用ひて

立所たちどころは平癒へいゆす、我是われを行おこなひんと普あまねく、産婦さんぶを尋たずねる所ところよ、今日けふ思おもはず汝なんぢが女
房によう、天子てんしのお役やくよ立たつたるこそ類たぐひひ稀まれ成身なりなりの冥加めいが、夫そのみならず人を殺ころし、
金錢衣服きんねんいふくを奪うばひしも、皆軍用ぐんようの助たすけの爲ためと始終しじうを聞きこて驚おどろく生駒なまがま、貞任ていにんの
母義ははぎと有あからひ、手てよかけられし女をが爲ためも、ホ、則母そつははといふ事ことか、サ、然しから
バ娘むすめと存知ぞんちの上うへイヤ、えらぬ、娘むすめと知したいたつた今いま、無念むねんのさいごをどげら
れし、夫頼時おつとの魂魄こんぱくをいまずがごとく此日ひ比祭置ひをまつりおきたる觸骸しゅっかいよ、女をの血汐ちしほ
まみ込こしひ、親子おやこの血筋うたが疑うたがひなしと、捜見さがしれバ此守このまもりよ我家わがやの系圖書けいず、扱あこ
そえつたる娘むすめが身みの上うへ、往時そのかみの敗軍はいぐんよ親子兄弟おやこあにちりゝゝなりし時とき、乳
母ははよ抱いだかれ別わかれし後のちに都九條みやこへ賣うれしと聞きこつれど、尋たずねとふべきいとま
もなく、打捨置うちすてしが彼等かれらが仕合しあはせ思おもはずえらず我娘わがむすめが君きみの病ひまふの薬くすりとな
るひ、手柄者がら共果報くわはう共此上このうへの有あべきか、でかしおつたとしてもなら響ひびて
やつて殺ころそふ物もの、何なんもえらず死しおつたがたつた一つ殘念ざんねんなど、鏡かがみのや

うなる兩眼がんもこたゆる涙はら、くく、實げにも貞任ちか宗任むねを產落うみおとしたる骨こつ
柄がらなり、生駒なまこ之助のすけ感かんじ入い、女をも稀まれなる大丈夫おやうふ去さながら、玉簾たまだれ深ふかき若宮わかしほをい
かッして奪うばひれしぞ、チ、それこそ宮みやの乳母めのどくしげ、匣はいしの内侍ないしを頼たのみ、密ひそに所ところ
を立たのかせし、いざ匣くしげ殿どの、此この藥くすりを宮様みやさまへ、どくくすくめやされよと、呼よ
出でせば一間いっけん、賤しづの姿すがたを其儘そのまま、立出たちで給たまふ匣はいしの内侍ないし、チ、それをこそ待兼かねし、
宮様みやさまの爲ため、い親共おやとも姉共あねとも、譬たとへん方かたなき老女らうにょの情なさけ、廿日ふたじふ餘あまりの月つきかけを移うつ
して用もちゆる此藥法このくすりほう、いで此藥このくすりを奉ほうらんと、空そらよさへ行月ぎやうつきかけを寫うつし取とよ
と見みへけるが、何なにどかえけん器うつわばつたり谷底そこへ、落おて血汐ちしほよ染しなす岩角いはかど、
こいそもいかよと驚おどろながら見下みさす谷やの岩間いはま、俄にわかもうづまく水みづのあし、
滑せく溜たくどわき上あれ、内侍ないしの水氣みづきも目めも放はなさず、守まもり誥ごてあら不思議ふしぎ
や、今いま產婦さんぶの惡血あくち谷底そこよえたり、れ、忽たちまち谷水やみづ逆さかまき上あつて土中どちゆうの穢けがれを清き
むる事こと、誠まことや水晶すいしやうのちりを受うけず、蓮葉はちすばの泥どろも汚けがれず、个か程ほど奇瑞さいを顯あらはす、正

しう尋る十握のハ劔此巖中ハ隠し有疑ひなし、ハア、有難や忝なやと、女
 姿もいつしか引かいつたる變生男子眉逆立て目の内も威有て猛き、
 其有様老女いたけつてうなり聲すどや、匣の内侍と偽りしハ實劔詮議
 の方便よな、ハ劔失させ給ひしハ、汝等親子が業ならんと内通の心を
 見せ、義家が一子八つ若をもつて環の宮と偽り女姿とさまをかへ付添
 來りし其ハ、八幡太郎義家が末弟新羅三郎義光と、はじめて名乗武將の
 系圖さすかの岩手も驚き只忙然たる計なり、生駒之助すゝみ寄君ハ稚
 き時よりも他家よて育給ひし故、かくや某迄ハ顔見えらぬ幸き、驚入た
 るハ方便不審成ハ其ハ種、物いひ給ハぬ病とハ、それこそハ稚者ハ、何
 事有共物いふな、事顯ハれてハ一大事といひ含たる止聲病、今日實劔の
 有所えれたるも汝が妻が死たる故、莫大の功なれば、兄よかいつて勘當
 赦し元のごとく主從ぞと情の詞ハ生駒が悦び、はつとひれふす計あり、

岩手の無念の玄だんだ踏^{ふみ}、口惜^{くし}や腹立^{はらだて}や、現在^{現在}娘を殺すといひ、是迄心を盡^{つく}せしも、皆むだ事で有たよな、よし此上の何とせん敵の片^{かた}われ其ちつぺい、ひねり殺して冥途^{めいど}の供^{とも}又つれんず物と立上る、そふいさせぬとさゝゆる生駒^{なりこ}振切袂^{ふりきりたもと}どゝむる袖放^{はな}せ放^{はな}さじもみわふ後の襖^{うしろ}を踏明^{ふみ}、鎌倉^{くまがら}の權五郎景政^{かぎまさ}、どくより是^{こゝ}守護^{しゆご}致すと、呼^より出し、以前の^{以前の}前髪^{まへがみ}肌^{はだ}の小具足^{こぐそく}小手^{こて}脚當^{けあて}八つ若抱^{わくら}きつゝ立て、我^{われ}君の仰^{うやう}を請^{うけ}岩手といふおはばを釣^つふ、此國へ入こんだ、かういふ時の後誥^{ごご}の役人^{やくじん}、叶^{かな}ぬえ、ゆらくらもやさず共寶劍^{ほうけん}出し降参^{かうさん}せよと聞より猶も無念^{むねん}の齒^はがみ、是までなりとえら刃^はの切先腹^{きりさき}又突立^{つきだて}どつかとす、り、とても叶^{かな}ぬわが運命^{うんめい}、かかる方便^{てだて}の有共えらず、夫^{おつと}の敵國^{ていこく}の仇^{あだ}子供^{こども}又討^うして高名^{かうめい}させんと、我慢^{がまん}もこつて邪非道^{よこしまひだう}、人を人共思^{ひとごと}ぬ、天罰^{てんばつ}忽報^{たちまちけ}ふて血を分^{わけ}し、娘を親がなぶり殺^{ころ}し、噓^{うそ}や苦しかりつらん、地獄^{ぢごく}畜生^{ちくじやう}餓鬼^{がき}修羅道^{しゆらだう}、其苦しみを身一つ、

うけし、因^{いんぐわ}果^{ぐわ}を斷^{たき}切^きて冥^{めい}途^との旅^{たび}でいひ譯^{わけ}せん娘^{むすめ}よ、孫^{まご}よまばらく待^{まち}と突^つ
こむ劔^{つるぎ}を口^{くち}よくいへ、椽^{えん}先^{さき}よりまつ逆^{さか}さま落^おてはかあくなりよける、新^{しん}
羅^ら三^{さん}郎^{らう}すゝみ立^た實^{じつ}劔^{けん}の此^こ谷^や底^{そこ}某^{むか}向^{むか}つて守^し奉^{ほう}らん、兩^{りゆう}人^{にん}外^{そと}面^{めん}は氣^きを付^つよ
といひ捨^す谷^やへ飛^とこめバ、下^{した}は伏^ふた^せる隠^{かく}し勢^{せい}挑^{てい}燈^{とう}松^{しょう}明^{めい}ふり立^たく、遁^{のが}さじ
やらじと「いどみあふ、谷^やの新^{しん}羅^ら上^うの兩^{りゆう}人^{にん}投^なおろしたる大^{だい}木^{もく}大^{だい}石^{せき}壓^{おし}
まうたれてあまたの人数^{にんず}微^み塵^{じん}も成^なて死^しでけり、猶^{なほ}もためらふ山^{やま}かげん、
安^{あん}倍^{ばい}の貞^{てい}任^{にん}是^{こゝ}有^あ見^{けん}參^{さん}せんと呼^よひつて、實^{じつ}劔^{けん}携^{たづ}へまづく立^た出^でかゝる
術^{てくて}もあらんかと、母^{はは}もまらさず付^{つけ}置^おき人^{ひと}手^て向^{むか}ひせしに彼^{かれ}等^らが役^{やく}目^め弟^{てい}
宗^{そう}任^{にん}を助^{たす}け義^ぎ家^か敵^{てき}の恩^{おん}を受^うながら軍^{いくさ}せんも心^{こゝろ}よからず去^さまよつて此^{こゝ}
は實^{じつ}、只^{ただ}今^{いま}渡^わすの宗^{そう}任^{にん}が命^{いのち}の返^{へん}禮^{れい}再^{さい}會^{かい}の戰^{せん}場^{じやう}と義^ぎ家^かの傳^{つた}へよと、實^{じつ}劔^{けん}渡^わ
し傍^{かたへ}ある母^{はは}の死^し骸^{がい}をいだし上^{かみ}不^ふ孝^{かう}の悻^{せがれ}遲^ち參^{さん}の誤^{あやま}りやみく生^{しょう}害^{がい}させ
ませし、殘^{ざん}念^{ねん}至^し極^{きよく}と物^{もの}數^ずをいねと籠^{こも}る千^{せん}万^{まん}無^む量^{りやう}新^{しん}羅^ら三^{さん}郎^{らう}感^{かん}じ入^い敵^{てき}な

がらも適勇士、辭退すさぬ寶劔の納る所の戰場、先夫迄、おさらば
と、寶劔携へ、生駒老女の作れる罪科も高燈籠の光も有、其火を消、汝
が手向と仰、はつと立寄て、松の立木を切倒せば、法の光も、消失て忽ち
ゆらの太鼓鐘、相圖、寄くる數万の軍勢、事こそと權五郎、生駒も谷
へかり立、騒がれあかた、高燈籠、此家の狼煙、消ると集る手筈
の軍兵、の警固して、八幡太郎の陣屋迄、つゝが、かく送り届、寛
仁大度の詞、はつと諸軍勢、四方を圍む、歸國の供、冥途の供、あき母の
死骸を抱、貞任が、胸、おがせと、かき乱す糸の、乱の苦、さをこたへる涙、
はらゝゝ衣の、たて、ほころびて、裾や袂と別るゝ道勇、新羅權五郎、
生駒が、脊、甥の殿、老ぞ籠、此原を、鬼籠れりと讀なせし、安達が、原の、黒
塚の、其古事を、末の代、語り、傳へて、殘しける

○第五

深きを以て淺きと入淺きを以て深きを知、其源や武將の百度、八幡太郎
 義家公、貞任が籠たる小松が柵に押寄らる、附従ふ輩より、舍弟新羅三郎
 義光、鎌倉の權五郎景政、其外一騎當千の鎧の袖も白簷も風も靡いてめ
 ざましき、景政は前より兩手をつき、兩將より暫く木影より御屯と、勸め立た
 る折も折、どつと寄手の鯨波、景政きつと見、ちよこさい成蠅虫めら、一
 所よりかくれど大手をひろげ、當るを幸ばら、さながら秋の木
 葉武者、勇氣より恐れて軍勢共、叶ひぬ赦せと逃行を、遁さじやらじと追て
 行、引違へて陣頭より踊出たる安倍、宗任、新羅三郎是より有望む所の宗任め、
 惡事のかたまり打碎かんと、どつと引ぬく並木の松、微塵もなれど打か
 くる、ミヤとねぢ合強力といまる勇力、いづくかかひ白羽の矢先二人の
 胸板はつと驚間もなく、貞任義家東西より立出給ひ、珍らしや貞任、汝命
 の恩を忘す、三種の神器を別條なく此方へ渡し、宸襟を休め奉る上から

い、義家が首取て頼時が冥途の妄執はらせよと、さも潔くの給へば、つ
と二人の頭を下、有がたき一言、日比の恨と貞任がつゝ立上つて鞘
ぐちよ、はつしと兜を打落し、拔々早く我と我右手の小脇よぐつと突立、
大將の前よどつかとすり、三十年來父の敵、討ふと思ふ鉄石心、義家公
の恵よ忽どろけし此上、弟の宗任を、家來となし下さらば、生前死
後の面目と、苦しき中よも弟を思ふ眞實、えんみの血の涙、大將よ便んど
思召いかゝ宗任、心を改め我慕下よ從ひ、安倍の家を引起せと、恵も厚き
は詞、今こそ願ひ達せし貞任、いづれもさらばと勇氣の最期、又も聞ゆる
鐘太鼓敵よいあらで鎌倉の權五郎、八割四郎を提出、主君よ敵對のら猶
め、是喰て死と打付る、引ばづして遊行を、衿がみ摺で宗任がぐつと一
め忠義の手始、かゝる所へ匣の内侍宮を誘ひ生駒之助、維時を高手よ禁
は前よ引居、謀叛の張本大江、維時、宮を奪取此國へ落下る、半途よ出合斯

の通と、詞の下より一太刀づき、朝敵亡びて源氏の勝鬬早凱陣とゐだやか
る國も、治る君が代の夜より増日増繁昌の源氏と壽り

明治二十四年六月廿四日印刷
明治二十四年六月 日出版

日本橋區通四丁目四番地

翻刻兼
發行 者

內 藤 加 我

印刷者

日本橋區新和泉町壹番地

瀧川三代太郎

發 兌

日本橋區通四丁目四番地

金 櫻 堂

